

六朝古逸『法華經疏』の 同本離片に関する一考察

金 炳 坤（慧鏡）

1 序 言

筆者の西域出土法華章疏に対する研究の始まりは、筆者が平成十九年度立正大学仏教学部国外研修（『ヨーロッパ仏教学の源流と比較文化研修⁽¹⁾』）に事務局として参加し、その研修地の一つであったフランス国立図書館（旧館）を訪れた（2007年8月31日）際に、かつて同館において三度の文献調査⁽²⁾を行った、元立正大学仏教学部教授兜木正亨博士の恩恵と、当年の国外研修の団長を務めた三友健容博士の要望、そしてそれにこたえてくれた図書館側の好意により、同館の所蔵するペリオ（Paul Pelliot, CE.1878-1945）将来敦煌漢文文献中、『妙法蓮華經』の注釈書〔P.4567〕を実見することができてからのことであり、その後取り組み続けている研究テーマの一つである。

西域出土文献はその点数もさることながらその多くが列強諸国の手により世界各国に分散、保管されているといった特殊な実情もあって、個人ではなかなか研究に手が付けられない状況が長らく続いていた。しかし近年、資料を保管する各国の機関の協力により、1994年には「国際敦煌プロジェクト」（IDP⁽³⁾）が設立されることとなり、また最近では、関連資料の目録や影印など有益な出版物が相次いで刊行されているなど、資料の拡充や整備が急ピッチで進められるようになるにつれ、次第にその全容が明らかになりつつある。

このように研究の体制が整えられ、またその機が熟しつつある現状を鑑みて、

筆者が研究のテーマに選んだのは、西域出土文献の、なかでもとりわけ法華章疏である。

西域出土法華章疏の研究に関しては、日本の矢吹慶輝博士（20点）をはじめ、藤枝晃博士（14点）、兜木正亨博士（34点）、上山大峻博士（21点）、平井宥慶教授（47点）、そして中国の方廣鋁博士（55点）による注目すべき研究成果があるが、平井宥慶教授の研究成果を除いては、いずれも総合的な研究とはいい難く、今なお研究の余地を残している。

したがって先達の知見に、最新の研究成果を反映して、これらを総合的に考察・検討していくことは、正しくこれからの研究課題になるのである。

2 研究の経緯と資料の概要について

さて、ペリオ将来敦煌漢文文献の説明にあたったナタリー・モノ博士（Nathalie Monnot）によると、[P.4567]は六世紀の写本で、『妙法蓮華經』の注釈書であり、「法華經疏」としてはかなり古いものであるということであった。

周知のように、鳩摩羅什の門弟にあっては、道生（CE.355-434）が元嘉九年（CE.432）に「義疏⁽⁴⁾」を著し、この『妙法蓮花經疏』二卷（SZ.27 No.577）が現存する最古の「法華經疏」であって、その後、梁の始めに至り、「講經の妙は当時に独歩す⁽⁵⁾」と評された法雲（CE.467-529）の『法華義記』八卷（T.33 No.1715）がこれに次ぐ、六世紀の代表的な「法華經疏」として現存するばかりである。

しかしながら、花山信勝博士の「南北朝の高僧約三百人に就いて統計を取ってみても、法華の製疏及び講誦等七十八名を最高として⁽⁶⁾」という指摘からも窺知されるが如く、当時の然るべき『法華經』研鑽の〈極めて盛んだった〉様子が推察されるところであるが、いかなる所以であろうか、これら「製疏」のほとんどは散逸して伝わらないのが現状である。

また六世紀の初葉には、婆藪槃豆の『妙法蓮華經優婆提舍』（T.26 Nos.1519,

1520・以下、『法華論』）が漢訳され、六世紀の末葉になると、ことに「晚見法華論」（晩年または近年になって『法華論』を見る）といい、本書に重きを置いていたことが知られる吉藏（CE.549-623）や、とりわけ後期の著作においてのみその影響が見られるとされる智顗（CE.538-597）が台頭してくるようになるが、[P.4567]（[暑70]・[S.2439]を含む）における経論章疏からの引用を検討してみると、經典の場合、主たる『妙法蓮華經』を除いては、わずかに『涅槃經』の経題を出す一例（P.4567 l87）と、「舊經」（P.4567 l89）として『正法華經』の経文を引証する一例とが確認できるだけで、論書の場合も直接引用は見当たらず、もちろん『法華論』からの影響も見受けられない。ただ、異説の一例が指摘されている⁽⁷⁾。

となると、本疏は『法華論』の訳出（菩提留支訳・CE.528）以前の、六世紀の初葉或いはいくぶんか『法華論』の影響が顕著となる、六世紀の末葉以前の著作ということになろうか。いずれにしてもこの辺りの法華教学の実情を知りうる史料は乏しい。

ところで、[P.4567]を一見した三友健容博士からは、本疏に「法身眞極」という特殊な術語が使われていることを指摘された。

この指摘があつて、また数日後には、モノ博士より三友健容博士宛に[P.4567]の複写が届いた（2007年9月5日）ため、これをもとに該当箇所を調べてみたところ、確かに「隨喜品」に「何以而然。欲明此信。乃於法身眞極理中。生此微解。」（P.4567 ll.57-58）とあることが確認できたのである。

それからいくたのテキストデータベースを駆使して「法身・眞極」の用例を詳しく調べてみたが、これにぴったりと合致する文例は見当たらなかった⁽⁸⁾。

ただし、『大正新脩大藏經』（以下、『大正藏』）第85巻の古逸部に収録されている『法華經疏』（T.85 No.2751）より類似する文例を確認することができた⁽⁹⁾。

この『法華經疏』は、[P.4567]のケースと同じく、敦煌の東南にある莫高窟の藏經洞（第17窟）より出土したもので、1907年にイギリスの探検家マーク・

六朝古逸『法華經疏』の同本離片に関する一考察（金）

オーレル・スタイン（Marc Aurel Stein, CE.1862-1943）によって蒐集され、現在は大英図書館に所蔵されている、写本番号 [S.2439⁽¹⁰⁾] がその底本であって、1925年までに矢吹慶輝博士によって日本にもたらされたものが、1932年になって『大正蔵』に収録されるようになったのである⁽¹¹⁾。

ここで始めて [P.4567] と [S.2439] とに出土地という共通点が見出されたのである。

また両本には、各品の冒頭に「從此已下。後世文中。」という、ほかの注疏類からは類をみない定型句の存することが確認できた⁽¹²⁾。したがって上二本の同本離片の可能性が浮かび上がってきたのである。

ただ、[P.4567]（「分別品」の半ば～「法師功德品」の前半）と [S.2439]（「神力品」の半ば～「普賢品」の半ば）とは直接つながるものではなく、その間に「法師功德品」の前半から「神力品」の半ばまでのおよそ三品を欠いている。

そこで、つなげば一具になるようなその間に入る写本を見つけるべく、敦煌文書の諸目録類を調査してみたところ、ちょうど「法師功德品」の前半から「神力品」の半ばまでを有する『法華經疏』を見出すことができたのである。

それは、現在中国国家図書館に所蔵されている、写本番号 [暑70⁽¹³⁾]（マイクロフィルム番号 BD06196）という『法華經疏』である。そして上二本の各品の冒頭において共通して見られる定型句を手がかりに、[暑70] の写本の写真をもとに、「不輕品」・「神力品」の冒頭を確認してみたところ、正しくこの定型句（「神力品」は「從此已下」のみ）が見出されたのである。

【表1】三本の形状分析

写本番号 ⁽¹⁴⁾	総行数	紙数 ⁽¹⁵⁾	一紙 ⁽¹⁶⁾				在品 ⁽¹⁷⁾	推定年代 ⁽¹⁸⁾
			縦	横	行数	界高		
P.4567	92	3	26.2	37.0	24	23.2	17-19/28	6世紀末
暑70	98	4	?	?	24	?	19-21/28	?
S.2439	240	11	26.2	36.2	24	23.5	21-28/28	6世紀初

しかも上三本の形状を分析してみると、さらに興味深い共通点が見られ、六世紀の白い紙（[P.4567]・[S.2439]の二本のみ）に書かれていること、また一紙の縦幅（[P.4567]・[S.2439]の二本のみ）と行数とが一致することが知られ、形状の面においても三本の同本離片の可能性が示唆されたのである。

したがって上三本（＝[P.4567]・[暑70]・[S.2439]）は、品順に並べると「分別品」の半ばから「普賢品」の半ばまでのおよそ十二品が一具となる、もと同じ卷子であったものが、何らかの理由によって切断され、現在は三分されてしまった、同本の離片にして、六朝時代に成立した古逸未伝の『法華經疏』である可能性が高まってきたのである。

ゆえに本稿では、上述してきた三つの共通点〈①「眞極」という術語や出土地、②各品の冒頭の定型句、③形状分析〉を状況証拠に、現在三国の三箇所（フランス国立図書館・パリ、中国国家図書館・北京、大英図書館・ロンドン）に分散、保管されている以下の三つの写本を研究の対象に、

・Pelliot Collection Bibliothèque nationale de France: Pelliot chinois Tonen houang 4567

・National Library of China: BD06196（暑70）

・Stein Collection British Library: Or.8210 / S.2439 ; T.85 No.2751

これらが同本離片にして、六世紀撰述の『法華經疏』の逸書であり、法華教学史のなかに新たに加えられるべき一書であることを論証していきたい。

3 三本の研究史について

以下では、[P.4567]・[暑70]・[S.2439]に関する従来の研究成果を総括し、これに若干の卑見を加えていくことにする。

3-1 平井宥慶説

この三本に対する平井宥慶教授の言及は、（平井宥慶 [1977b] p.233）に

[S.2439] と [暑70] とが「Ⅱ表題のないもの（A）[法華⁽¹⁹⁾] 經疏」として分類（[P.4567] は言及されない）されることに始まり、この二本の概説は別稿において、[S.2439] については「（2）S.二四三九（G.五六一〇）T二七五一（大正八五・一九四c～一九九a）『鳴沙余韻解説』に「恐らく北魏の未伝或は古逸疏か⁽²⁰⁾」とする。G.目録も六世紀初期とする。書体もこの時期のものに類似する⁽²¹⁾。これには各品内を分段する傾向がみられ、その度合は、この注疏の性格を判断する上に着目すべき点の一つといえそうである。」（平井宥慶 [1977c] p.64）と、[暑70] については「（6）北京本・暑70（フィルム・ナンバー六一九六）首尾破損。写真から見る限り、三紙九八行（『劫余録』は四紙という）、各行二五字前後に字詰され、用紙には界線がある模様。右上りの楷書に近い草書体で筆太の毛筆書きと思われる。この右上りの特徴はかなり目立つもので、（2）のS.二四三九に類似するが、両本が同一本かどうかは確定しない。一枚目の背面に「妙法蓮華經」とある。釈文は法師功德品の末尾九行、常不輕菩薩品の全文、如来神力品三十八行あり、まだ続くべきものが切断されている状態である。ある程度の分段が行われているようで、一品内においても經文をいくつかの段落に分けて大意を附すという注釈方法をとっており、かえって要句・難語の訓詁注釈は稀薄である。」（平井宥慶 [1977c] p.66）と述べ、上二本の書体が類似することを指摘するも、同一本如何に関しては明言を避け、二本を同時代の文書として分類（第二類⁽²²⁾）するにとどまる。

また、（平井宥慶 [1978a] p.803）では「S二四三九本の筆法に類似するものに暑70があり、両本とも各品の初文は「從此已下」と始まる場合が多い。このように始まるものには玉26も同様である。これらには明らかに全体にかかわると思われる科段の傾向が認められる。」と述べ、改めて上二本の筆法が類似することを指摘し、新たに各品の冒頭に共通する文例（定型句）が見られることや全体に関わる分科が認められることを指摘する。

上二本の関連性について具体的に論じられるのは（平井宥慶 [1978b] pp.117-

120) において、「この両本は同一疏本の切断せられたものとみておきたい。」(p.119) と結論付け、以下の二つの論拠を挙げている。

- ① (チ) 北京本『暑70』(写真番号六一九六) ……神力品の冒頭に「從此已下經之大段第四流通文也」とあり、この流通文に「就中大判凡有三文」と分けて、第一神力品、第二囑累品、第三藥王品以下經末の三分あり、この神力品はその第一に当る。……(ト) 本 (= [S.2439]) は……囑累品の冒頭に「從此已下後世文中第二文也」(大八五・一九五 a) とあり、藥王品の冒頭には「從此已下訖於經末後世文中大段第三教二依未來之世流通法用」(大八五・一九五 b) とあって、これは前述した(チ) 本の神力品冒頭にある大科段の区切り方と一致する。(平井宥慶 [1978b] pp.117-119)

すなわち、[暑70] において示される本疏の流通文の分科が [S.2439] とつながっていることを立証したのである。その対応文例を示せば、以下の【表2】のとおりである。

【表2】經の大段第四流通文の一致（[暑70]≡[S.2439]）

大段第四流通文	該当品の対応文例
神力品 從此已下。經之大段。 ^① 第四流通文也。上來廣明因過果二理訖之於上。自下如來得欲本付二依。囑通週代。彼異世同風。法輪不絕。故有此一段文興。就中大判凡有三文。	
^① 第一。神力一品。如來欲付囑二依。是故先 ^A 現五種瑞相以之爲序。	⇒ 故名神力品。就此品中凡有四文。……第二。從爾時世尊已下。訖如一佛土。如來廣 ^B 現五種瑞相以之爲序。 (BD06196 p.3 //66-68)
^② 第二。囑累一品。正明 ^C 如來口自誡勅。	⇒ 囑累品從此已下。後世文中。 ^D 第二文也。……故言囑累品。就此品中凡有四文。第一。從初以下。訖普得聞知。欲明 ^E 如來口自懇勸誡勅二依。 (T.85 no.2751 p.195a, //20-26 · S.2439 p.2, //27-31)

◎第三。從藥王已下。訖於經末。教作未代◎流通法用。（BD06196 p.3 //61-65）

⇒

藥王品 襲 從此已下。訖於經末。後世文中。大段◎第三。教二依。未來之世◎流通法用。（T.85 no.2751 p.195b, //25-26・S.2439 p.3, //48-49）

②（チ）北京本『暑70』……法師功德品の尾部から神力品「説此經功德猶不能尽」の釈文半ばまで有し、その末部が前記の（ト）本に続くかどうかを科段表にして図示すれば次のごとくで、神力品……に「就此品中凡有四文」と四段に分つ。偈の三項はそれぞれ順次に長行の（二）（三）（四）に当り、（一）については「不頌」。この中の長行（三）「若我以是神力」の注釈半ばで（チ）写本は破断しており、（ト）本はその直後に相当する部分から始まっている。これを科段的に接続させると、右のごとく過不足なく連結が可能である。（平井宥慶 [1978b] pp.117-119）

すなわち、[暑70] において示される本疏の「神力品」の分科が [S.2439] とつながっていることを立証したのである。その対応文例を示せば、以下の【表3】のとおりである。

【表3】「神力品」の分科の一致（[暑70] ≡ [S.2439]）

「神力品」の分科		長行の対応文例		偈頌の対応文例
故名神力品。就此品中凡有四文。				
^(a) 第一。從初已下。訖而供養之。明 ^(a) 踊出菩薩請求流通。	⇒	^(a) 此諸菩薩在 ^(a) 踊出品中求此土流通。今明其人復求他方流通。 (BD06196 p.3, //70-71)	⇒	偈中之明不頌。品初 ^(a) 第一。諸 ^(a) 菩薩請求流通。 (S.2439 p.1, //17)
^(b) 第二。從爾時世尊已下。訖如一佛土。如來廣 ^(b) 現五種瑞相以之爲序。	⇒	^(b) 從爾時已下。 ^(b) 第二文也。就中凡有 ^(b) 五種力。 (BD06196 p.3, //74)	⇒	^(b) 初有三偈頌。上 ^(b) 第二。五種瑞相。 (S.2439 p.1, //17-18)

^(c) 第三。從佛告上行菩薩已下。訖宣示顯說。明 ^(c) 經理深。勸其流通。	⇒	^(c) 從爾時佛告上行等已下。品之 ^(c) 第三。正明如來親自 ^(c) 口告舉經理深以歡二依。 (BD06196 p.4, ll.95-96)	⇒	^(c) 從以滅度後已下。十一偈半頌。上 ^(c) 第三。 ^(c) 口告舉經理深以勸二依。 (S.2439 p.1, ll.19-20)
^(d) 第四。從是故汝等於如來滅後已下。訖於長行。 ^(d) 結勸二人。受持流通。 (BD06196 p.3, ll.66-70)	⇒	^(d) 從是故已下。品之 ^(d) 第四。 ^(d) 結勸二人。 (S.2439 p.1, ll.10-11)	⇒	^(d) 從是故已下。一偈半頌。上 ^(d) 第四。 ^(d) 結勸二人。 (S.2439 p.2, l.27)

さて平井宥慶教授は、この二本（＝[S.2439]＝[暑70]）の同本離片たる所以を、上記の（平井宥慶 [1978b]）に次いで、その補正稿と位置付けている（平井宥慶 [1981b]）を経て、それまでの研究成果を総括している（平井宥慶 [1993] pp.653-657）において、最終的に以下の三つの論拠を挙げて結論とする。

さてこの二本は釈文に重なるところがない。しかし釈されるべき経文を連ねてみるとほとんど接近し、そこで両者を比べてみた結果、これはほとんど同一疏の各部分、という判断を、我々は次の理由から抱くに至った。

- 1、この疏の特徴の一つは、科段構成に注釈勢力を費やしていることである⁽²³⁾。このことだけでも充分に、この疏の特徴を言い得る。そこでその科段を摺り合わせてみると、過不足なく縫合をみた。それは現存する疏にそれぞれ特質をもつ事実からみれば、偶然の接合とはみられない。
- 2、注釈方法が、各品の冒頭句も含めて、酷似する。こういうものは注釈者それぞれにそれぞれの形式があるもので、これも「偶然の一致」は考えられない。先ず冒頭句を列挙すると、

「從此已下」不輕品・神力品・囑累品・藥王品・陀羅尼品（從此下）・妙莊嚴品（從已下）

「此(其)人」妙音品・觀世音品・普賢品

これは「定型句、であろうか、という疑問もあろうかもしれないが、[B]（＝[S.2463]）本の状態を知っている我々としては、これは十分に「定

六朝古逸『法華經疏』の同本離片に関する一考察（金）

型、と見なし得ると思考する⁽²⁴⁾。この科段解釈に続いて当該品内の科段が示される形式で一致を見る。

3、その書体が著しく近似する。それは隸書体風を若干残した右上りの特徴的な字体で、専門的な字体鑑定術を心得ない者でも、敦煌写本を見なれている者としては、これは充分に見分けのつくほどに、それは似かよっている。この書体は北朝期を特徴づけるものとも言われているものである。大体に敦煌写本の字体には、それぞれ書かれる内容の性格によって字体の傾向もあるごとくで、所謂筆跡鑑定なるものに習熟するよりも、その字体の傾向に着目することによって、比較検討するとき、經典注釈疏については、現存するものに限っては幾つかのタイプが認められる。少なくともこの両本は一組として、その一つのタイプに指定してよいと考えられるという意味で、この両本の字体は酷似している。

このうち注目すべき点は、2において指摘される各品の冒頭の定型句の存在であって、これに [P.4567] の定型句をも一括して示せば、以下の【表4】のとおりである。

【表4】各品の冒頭の定型句

一具 品	[P.4567]			[暑70]			[S.2439] (T.85 No.2751)										
	17	18	19	19	20	21	21	22	23	24	25	26	27	28			
定型句 ⁽²⁵⁾																	
從此已下 [○] （後世文中 [○] ）		◎	◎		◎	○		◎	◎								
從此 下文												△					
從 已下													△				
其人乃 法身大士										●							
此人亦是法身大士											●						
此人乃是法身大士																●	

すなわち、この三本（=[P.4567]・[暑70]・[S.2439]）は共通の定型句を共有することになる。

しかし平井宥慶教授は [P.4567] については、

この写本は品頭が「從此已下」で始まり、「後世文中第二經文 [隨喜品]」（「法師品」は「第三文、）というから、予め大科段の指示が存したにちがいない。そして「就此品中凡有二文」（隨喜・法師品）の如く中科段が標示され、「從～已下～訖る」形式⁽²⁶⁾を基調として（時に「～者」「故言～」）經文の科段積がなされていく。つまり [D] 本（＝① [暑70]・② [S.2439]）方式そのままである。実は字体もまことに良く似ているところがある。というのは、当写本は複数人によって書写されたといえようのない二種類の字体によって成りたっているからである。これは少なからず当惑する事実といわなければならない。写真四枚のはほぼ後二枚が [D] 本に酷似、前二枚は、敢えて言えば [E] 本（＝[P.3308]）の系譜に近いのではないと思われる、特別な癖を感じさせない書体である。但し [DE] 本（＝[玉26]）とは明確に違う。これはどういうことなのであろうか。（平井宥慶 [1993] p.662）

と述べ、[P.4567] の注釈形式や筆跡（写真四枚のはほぼ後二枚）が [暑70]・[S.2439] と同様或いは酷似していることを指摘していながらも、三本を同本離片とは規定せず、以下の【表5】において示されるように、

【表5】『法華經』に関する北朝期に属する疏の敦煌写本の思想の系譜⁽²⁷⁾

思想の系譜（三類）		写本番号
・万善同帰（莫二・一乗道）型	⇒	[S.2733]・[S.4102]、[暑70]・[S.2439]
・破三帰一（万善同帰・一乗道）型	⇒	[S.2463]、[P.3308]（「万善同帰」なし）、 [玉26]（「万善・一乗」なし）
・開一為三、合三为一（万法皆空）型	⇒	[淡32]、〈[P.4567] 般若空学?〉

諸本の思想の系譜を示すなかで、[P.4567] を [暑70]・[S.2439] とは別系譜と分類し、これを明らかに別疏〈[P.4567]≠[暑70]≡[S.2439]〉であると看做しているのである。

おそらく平井宥慶教授は、[P.4567]に相反する**二種類の字体**が存することから、[暑70]・[S.2439]と字体が酷似する、「隨喜品」以下（P.4567 143f）からを検討の対象とし、字体の異なる「分別功德品」は検討の対象から外したのであろう。そのために、本疏に「隨喜品」を第二と「法師功德品」を第三とする、**大科段**の存することまでは推定できたものの、その大科段の詳細な分科こそが字体の異なる「分別功德品」において示されていることは見落としているのである。この点については、4において詳述する。

3-2 その他の説

以上のように、平井宥慶教授は上三本のうち、[暑70]と[S.2439]の二本に關してのみこれを同本離片と認めているのである（〈[P.4567]≠[暑70]≡[S.2439]〉）。

しかしその一方で（『BnF』V [1995]）によれば、[P.4567]と[S.2439]とが同本離片であるという指摘がなされている（〈[P.4567]≡[S.2439]〉）。以下その原文翻訳を掲げる。

4567 妙法蓮華經の注釈書 / 首尾欠損。卷第五、第十七品の前半部を欠き（最初の經文：T. 262, vol. 9, p. 45 b 11.1-13.2、2行目）、卷第六、第十九品の前半部までを有す（最後の經文：p. 47 c 8.2-5、86行目）。/ 中間の副題：隨喜 [功德] 品 [number 18]、43行目、及び法師功德品 [number 19]、79行目。/ 同本離片、S. 2439参照（21から28品まで）、T. 2751, vol. 85, pp. 194 c-199 aに収編。 / TKHK, p. 221, number 202参照。/ …… / 6世紀末 [26,5 × 142,8 cm]⁽²⁸⁾

しかしその論拠とするところは明かされていない。

また、（『BnF』V [1995]）を受けたものであろうか、その後に発表される（方廣鋁 [1998F] p.45）にも、「本疏は隨文釈義に非ず、各品の大意を解明することに重点がある。「普門品重頌偈」⁽²⁹⁾の釈文を欠き、「世」の字（例えば「觀

、世音品」など）を避けていない。字体は南北朝の写本である。釈文に引用その他の論師の論述は極めて少なく、全体を通じてほとんどが作者本人の叙述である。本疏（＝[P.4567]・[S.2439]）は中国の歴代大蔵經には所収されておらず、敦煌から出土した後、スタインコレクション2439号の録文が『大正蔵』の第85巻に収められた。現在ペリオコレクション4567号に基づいてこれを補充することができる⁽³⁰⁾。」と同様の指摘がなされているが、ここでも十分な論拠は示されていない。

推察するに（方廣鋳 [1998F]）は（方廣鋳 [1997A]）の修訂稿であるが、（方廣鋳 [1997A]）では [P.4567] についてまったく言及されていないために、おそらくは方廣鋳博士が（方廣鋳 [1998F]）の段階で（『BnF』 V [1995]）の情報をそのまま踏襲したものであろうか。

ともあれ、上記の指摘に基づくならば、この時点で必然的に上三本を同本離片と看做すことも可能であろうが、問題はそれほど単純ではない。

なぜなら、（方廣鋳 [1998F] p.45）には、「上記の両号（＝[玉26]・[暑70]）は文章の形式が一致し、筆跡も同様であることから、同一人物によって書写された同一種類の経疏であろう。原巻に標題はなく、今の題（『法華經疏』）は内容に基づいた擬題である。巻首の散佚のため、本疏の科文を明確にすることはできない。釈文は比較的に精しい。文章のスタイルから見て、六朝時代の作品であろう。本疏は歴代大蔵經に所収されていない⁽³¹⁾。」とあり、方廣鋳博士は [P.4567]・[S.2439] の存在を知っていながらも、この二本と [暑70] との関係については何も言及せずに、むしろ [玉26] との関係（同本離片）についてのみ言及しているからである。

すなわち方廣鋳博士は、[P.4567] と [S.2439] は同本離片であっても、[暑70] はこの二本とは別本であると看做しているのである（[玉26]≡[暑70]≠[P.4567]≡[S.2439]）。

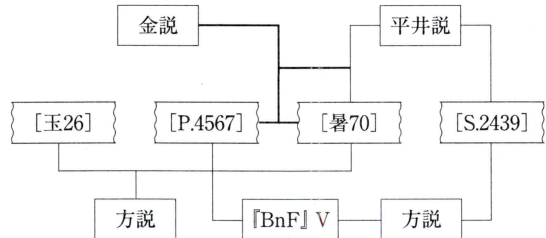
ちなみに平井宥慶教授は、[玉26] と [暑70] とを同本離片とは看做していな

い（【表5】参照）。

4 三本の同本離片たる所以

かくしてこれまでみてきた三本に対する先行研究の諸説を総括してみると、右の【図1】のようになり、先行研究においては、未だ三本を同本離片とする説は確認できなかったのである。

【図1】三（四）本に対する先行研究総括及び研究課題



したがって以下では、[P.4567] と [暑70] の同本離片たる明確な論拠を提示し、三本の同本離片たる所以を論証していきたい〈[P.4567]≡[暑70]≡[S.2439]〉。

さて先述したように、平井有慶教授は、[P.4567] の「隨喜品」の途中から字体が変わることで、前半の「分別功德品」は検討の対象から外している。

しかし [P.4567] の「分別功德品」には、「復た如來滅後⁽³²⁾」と有る従り已下は、[經の大段^(C) 第三（正説文か）の]⁽⁷⁾ 果門⁽³³⁾ 中の大段⁽⁸⁾ 第四、⁽⁹⁾ 後世流通を明かす。就中、四（＝^(A)～^(D)）有り。」（P.4567 Ⅱ.13-14）と始まる、本疏における「果門中の大段第四」の分科が示されている。

この分科によれば、本疏の「果門中の大段第四」には、さらに四つ（＝^(A)・第一「復如來滅後」従り已下「分別功德品」の品末の訖りまで、^(B)・第二「隨喜 [品]」一品、^(C)・第三「法師功德 [品]」一品、^(D)・第四「不輕 [品]」一品）の段落があるとされているが、ここで注目すべき点は、「第四「不輕 [品]」一品」（P.4567 Ⅱ.16）とある分科及びその概要が [暑70] のそれとまったく一致することである。その対応文例を示せば、以下の【表6】のとおりである。

【表6】〔經の大段第三の〕果門中の大段第四の一致（〔P.4567〕≡〔暑70〕）

果門中大段第四後世流通		該当品の対応文例
㊦従有復如來滅後已下。 ^(?) 果門中大段 [㊦] 第四。明 [㊦] 後世流通。就中有四。		
㊦第一。從初已下。訖此品末。明 [㊦] 上品等弟子。上依法師。二人功德。	⇒	〔分別品〕 ^{㊦㊦} 從初已下。舉 [㊦] 二人功德。之時意在勸持。 (P.4567 ll.19)
㊦第二。隨喜一品。 [㊦] 下品弟子。持經功德。	⇒	隨喜品 從此已下。後世文中。 [㊦] 第二經文。前品以明上品弟子。持經功德。此品中明 [㊦] 下品弟子。持經功德。 (P.4567 ll.43-45)
㊦第三。法師功德一品。明 [㊦] 下依法師。弘經功德。	⇒	法師功德品 從此已下。後世文中。 [㊦] 第三文。上品已明上依功德。此品中明 [㊦] 下依功德。 (P.4567 ll.79-81)
㊦第四。不輕一品。欲明 [㊦] 如來列已爲證。我親過去受持宜通。師及弟子俱得三報。 (P.4567 ll.13-17)	⇒	不輕品 從此已下。後世文中。 [㊦] 第四文也。自上已來。明聽說二人受持流通功德無量。時衆情遲未往深信故。從此已下。 [㊦] 如來親爲列已爲證。我曾過去受持流通。師及弟子俱得三報。 (BD06196 p.1 ll.9-12)

したがって、〔P.4567〕の「分別功德品」において示される、本疏の「果門中の大段第四」の分科が〔暑70〕においても一致することから、〔P.4567〕と〔暑70〕はこの分科の面において、同本離片〈〔P.4567〕≡〔暑70〕〉といえるのである。

この事実こそが上二本を同本離片と言いうる、十分かつ決定的な論拠になるのである。

ゆえに、平井宥慶教授によって論証され、かつ筆者によって再検証（【表2～4】）されている〔暑70〕と〔S.2439〕を同本離片とする説〈〔暑70〕≡〔S.2439〕〉に、筆者によって論証された上記の〔P.4567〕と〔暑70〕を同本離片とする説〈〔P.4567〕≡〔暑70〕〉を合わせれば、この三本は同本離片ということになるのである〈〔P.4567〕≡〔暑70〕≡〔S.2439〕〉。

さて、〔P.4567〕と〔暑70〕が同本離片であることが証明されたことによっ

て、もう一つの問題に対する解答が得られるのである。

それは、平井宥慶教授によって「当惑する事実」と称されている、[P.4567]における**二種類の字体**⁽³⁴⁾の問題であって、これが同本離片である以上、考えられることは一つで、本疏は少なくとも二人以上の複数人によって写記されたということである。すなわち、**写経グループの存在**が示唆されるのである。

したがって、二種類の字体の問題はクリアできるし、また本疏には字体の異なる同本離片が存在する可能性も考慮しなければならなくなったのである。

その可能性を秘めている写本は、平井宥慶教授・方廣鋤博士によって取り上げられている〔玉26〕と〔P.3308〕（本疏もが同本離片であるということになれば、本疏の釈者は**利都**⁽³⁵⁾ということになる）であるが、この点については、本疏全体に関わる分科の検討も視野に入れて今後の課題にしたい。

5 本疏の一經四段の分科について

本疏は「神力品」の冒頭に「此れ従り已下、經の大段、^(D) **第四流通文**なり。」（BD06196 p.3, ll.61-62）とあり、經の大段が示されている。

すなわち本疏は、「神力品」から「普賢品」までの八品を、經の大段中、最後の第四番目にあたる**流通文**とするのである。ただし、それ以前の經の大段第三などの名称及び段落分けについては、現存する「分別功德品」から「不輕品」までの間には見当たらないために、不明とせねばならない。

ともあれ本疏（[P.4567]≡[暑70]≡[S.2439]）は、**一經四段の構造を特徴とする『法華經疏』**であることが明らかになったのである。

現存する三本をもとに本疏の分科を示せば、以下の【表7】のとおりである。

【表7】一經四段の分科

分科	品	行数 ⁽³⁶⁾	本 文
3-?-4-1	17	//43	「分別品」は首欠のため不明。
3-?-4-2	18	37	隨喜品 <u>從此已下</u> 。後世文中。 [㊦] 第二經文。 (P.4567 //43-44)
3-?-4-3	19	14//9	法師功德品 <u>從此已下</u> 。後世文中。 [㊦] 第三文。 (P.4567 //79-80)
3-?-4-4	20	53	不輕品 <u>從此已下</u> 。後世文中。 [㊦] 第四文也。 (BD06196 p.1, //9-10)
4-1	21	38//27	神力品 <u>從此已下</u> 。經之大段。 ^(D) 第四流通文也。 (BD06196 p.3, //61-62)
4-2	22	21	囑累品 <u>從此已下</u> 。後世文中。 [㊦] 第二文也。 (T.85 no.2751 p.195a, //20-21・S.2439 p.2, //27-28)
4-3-1	23	34	藥王品 襲 <u>從此已下</u> 。訖於經末。後世文中。大段 [㊦] 第三。 (T.85 no.2751 p.195b, //25-26・S.2439 p.3, //48-49)
4-3-2	24	39	妙音品 <u>其人乃法身大士</u> 。先應東方。 (T.85 no.2751 p.196a, //15-16・S.2439 p.4, //81)
4-3-3	25	27	觀世音品 <u>此人亦是法身大士</u> 。妙音一流先應 ⁽³⁷⁾ 西方。此土有緣私化到此。 (T.85 no.2751 p.196c, //18-20・S.2439 p.6, //119-120)
4-3-4	26	15	陀羅尼品 <u>從此下文</u> 。所以而 ⁽³⁸⁾ 興猶明方軌。 (T.85 no.2751 p.197b, //4-5・S.2439 p.7, //146)
4-3-5	27	14	妙莊嚴王品 <u>從已下</u> 。欲教衆生未來。應當藉善知識。 (T.85 no.2751 p.197b //29 - p.197c, //1・S.2439 p.8, //161)
4-3-6	28	67//	普賢品 <u>此人乃是</u> ⁽³⁹⁾ 法身大士。妙音一流 ⁽⁴⁰⁾ 奪應東方。此去有緣隨感到此。 (T.85 no.2751 p.197c, //21-23・S.2439 p.8, //174-175)

一經四段の分科については、法雲の師として知られる僧印（CE.435-499）の分科が知られているが⁽⁴¹⁾、吉藏の『法華義疏』によれば、僧印の分科は、①「序品」を序〔文〕と、②「方便品」より「安樂行品」の竟りまでの十二品を乘方便乘真實〔文 or 段〕と、③「涌出品」より「分別功德品」の「彌勒說偈」（T.9 no.262 p.44b, //8）に至る以前の兩品半を身方便身真實〔文 or 段〕と、④「分別功德品」より經の竟りまでを流通分とするため、「神力品」已下を流通文とする本疏の分科とは一致しない。

6 三本の翻刻

〈凡例〉

*翻刻資料（本稿でいう「写本の写真」とは以下の翻刻資料のことを指す）は以下のとおり。

[P.4567] は、フランス国立図書館のナタリー・モノ博士より三友健容博士宛に送られてきた複写を三友健容博士より提供していただいたため、これを使用した。ここに記して深く感謝申し上げたい。

[暑70] は、東洋文庫の所蔵するマイクロフィルムからの紙焼きを底本とし、『敦煌寶藏』第97冊（242b-244a 頁）に収録されている影印をも合わせて参照した。

[S.2439] は、東洋文庫の所蔵するマイクロフィルムからの紙焼きを底本とし、『敦煌寶藏』第19冊（459a-464a 頁）に収録されている影印をも合わせて参照した。ただし [S.2439] は、すでに『大正蔵』第85巻（194c-199a 頁）に収録されているため、ここでは経の分段第四の分科が示される「藥王品」までを再翻刻し、『大正蔵』の翻刻ミスを改めた。なお、[S.2439] の翻刻原文に用いた^(196a15)などは『大正蔵』の頁数を示す。

*翻刻原文の註は該当語の最初に付した。なお、翻刻原文に用いた符号は以下のとおり。

「P.4567_92 (26)・BD06196_P.04_98 (26)・S.2439_P.04_081 (21)」—〔_P.04 — 紙焼きの頁数、_98 — 全98行中98行目、(26) — 一行の文字数〕 ○ — 筆者には判読できない文字（異体字など）。〔…〕 — 筆者による誤字・脱字の補填。{|…|} — 書写・校閲者による添字 レ — 書写・校閲者による返り点。々 — おどり字（補って記した）。【●】 — 偈頌積の始まり。

*翻刻原文に用いた下線は、經典からの引用文例・重複引用、論書・章疏との類似文例を示す。なお、句読点・太字（科段・主要・反復使用々語）は筆者の任意による。

〈科段の記号〉

*本疏の科段を示すために用いた記号は以下のとおり。

3. (C) 不明（正説文か）

3-?. (?) 果門

3-?-3. ⊖不明

3-?-3-1. (a)(b)(c)~

3-?. ⊕後世流通【門の分段第四、有四】

六朝古逸『法華經疏』の同本離片に関する一考察（金）

- 3-?-4.1. ①分別品（上品弟子・上依法師）
- 3-?-4.2. ②隨喜品（下品弟子）
- 3-?-4.3. ③法師功德品（下依法師）
- 3-?-4.4. ④常不輕（師及び弟子の三報）
- 4. (D) 流通文【經の大段第四、有三文】
- 4.1. ①神力品
- 4.1-1. (a)(b)(c)～【品の大段】
- 4.1-1-1. ①②③～【品の中段】
- 4.1-1-1-1. ①②③～【品の小段】
- 4.2. ②囑累品
- 4.3. ③藥王品以下

6-1 [P.4567] の翻刻

P.4567_01(25): ⁽⁴²⁾會於佛性無始終法。故體是常。此中亦然末後一偈半。結其行者

P.4567_02(27): 要文生{修}因。方生此信也。^(b)從⁽⁴³⁾又阿逸多已下。訖無上之慧。
^(b)第二品。人習

P.4567_03(25): 種之中。聞說真果。已能解其文下之旨。故云。解其言趣。既有此解

P.4567_04(24): ⁽⁴⁴⁾萬行扶疎。故云。功德無有限量。能解法身無窮之壽理無異趣。

P.4567_05(25): 此解爲因妙果嚮應。故云。能起無上之惠。^(c)從⁽⁴⁵⁾何況廣聞是經已下。

P.4567_06(26): 訖當知是爲深信解相。^(c)第三品。人習種之上。就中有二文。^(d)第一。從初

P.4567_07(27): 已下。訖一切種智。宣出信。深解體。^(d)第二。從阿逸已下。訖末出深信解相。

P.4567_08(26): 此人已得一分正義。解過前二上之二人。^(d)但能自行不能外化德尙

P.4567_09(24): 無量起。豈況此人自行。兼他功德俱然廣大難量。故云。自持教

P.4567_10(25)：人持。是人功德無量無邊。此解爲因妙果必應。故言。能生一切種

P.4567_11(26)：智。^⑤阿逸多已下。出其根⁽⁴⁶⁾^[根]。上雖況出深信解體未知。此人有何相也。

P.4567_12(24)：欲明此人得理餘明。故言。聞說壽命深心信解。既達其真亦知

P.4567_13(24)：應不。故云。見佛常在崛山。若有此相必是其人。⁽⁷⁾^⑥從有⁽⁴⁷⁾復如來滅

P.4567_14(25)：後已下。⁽⁷⁾果門中大段^⑥第四。明^⑥後世流通。就中四_レ有。^④第一。從⁽⁴⁸⁾初已下。

P.4567_15(27)：訖此品末。明^④上品等弟子。上依法師。二人功德。^⑥第二。隨喜{一品}。^⑥下品弟

P.4567_16(28)：子。持經功德。^⑥第三。法師{功德}一品。明^⑥下依法師。弘經功德。^⑥第四。不輕一品。

P.4567_17(24)：欲明^⑥如來列已爲證。我親過去受持宜通。師及弟子俱得⁽⁴⁹⁾三報。

P.4567_18(24)：⁽⁵⁰⁾明經理深益物處大。若爾以往法師未來不得不說。弟子未來

P.4567_19(26)：不得不持。^⑥⁽⁵¹⁾從初已下。舉^④⁽⁵²⁾二人功德。之時意在勸持。若聞是經而不毀

P.4567_20(26)：些者。此是下品弟子。不欲明此下品弟子。舉下品來。況出上品。若能

P.4567_21(27)：於此法身理中生信無疑。卽與^(a)上品二人不異也。所以者。能常此^[?]解以

P.4567_22(26)：明增進。便作上品何得有異。故言。當知已爲深信解相。^(b)從何況讀誦

P.4567_23(26)：已下。訖作是供養已。正是^(b)況出深信解人。斯人卽爲頂載如來者。此

P.4567_24(25)：人善達法身如來。故云。頂載。但能持經不須有中造塔供養。下

釋⁽⁵³⁾

P.4567_25(26)：所以不須起塔者。何凡有二義。^(a)一但持經⁽⁵⁴⁾冥順聽心即法供養。

故言。

P.4567_26(26)：已起塔。^(b)二但持經憶而不忘會{理}生解。即是慧業。導生萬行已兼起

P.4567_27(25)：塔有中供養。是其福業。不能兼導不如惠也。不順^[須]有中興供養也。

P.4567_28(26)：^(c)從⁽⁵⁵⁾阿逸多若我後^[レ]滅聞是經典已下。訖及造僧坊供養衆僧。明下依

P.4567_29(26)：功德。亦不欲明下依德也。亦是舉來。況出上依。下依未來。若能自行

P.4567_30(26)：教人流通此經利益處大。亦復不須有中修行。所以得是^(c)下依也。經

P.4567_31(27)：文言。爲他人說。明知是師前者。但言供養知是弟子。^(d)從況復有人已下。

P.4567_32(27)：正是^(d)況出上依人。前明下依。但能通經功德已大。況復上依。能流通經。

P.4567_33(25)：復能兼行有中諸行。此德俱然廣大無量。故譬如虛空。^(e)從若人讀

P.4567_34(25)：誦已下。所以^(e)重舉上依德者。欲明上依⁽⁵⁶⁾未來通經益物處大。勸上

P.4567_35(26)：依弟子供養。上依將勸供養故廣出德也。^(f)從⁽⁵⁷⁾是善[男]子已下。正勸供養。

P.4567_36(26)：若坐行處者。上依之人行坐之處。皆應起塔而供養。之一切天人者。

P.4567_37(31)：正是^(f)上依弟子也。●自下偈中但頌後世經文。略而{不}頌。^[?]現在之世中品⁽⁵⁸⁾二信人{也}。

P.4567_38(27)：^(b)⁽⁵⁸⁾初五偈半頌。上況出復信解人。^(b)從何況讀誦已下。說作是供

養已。^(c)文略

P.4567_39(27): 不頌。舉下品弟子。^(d)從[若]能持是經已下。有六偈頌。^(c)前下依功德。^(d)前明上依

P.4567_40(24): 德中遵上依德。譬如虛空。今此偈中明下依德。亦如寄文說也。

P.4567_41(25): ^(c)從況復持此經已下。有三偈頌。^(d)前上依功德。^(c)前長行中重舉上依

P.4567_42(25): 德。勸上品弟子興供養者。亦略不頌。^(f)從若見此法師已下。訖偈頌

P.4567_43(15): ^(f)前上勸上品弟子供養上依也。 隨喜品

P.4567_44(28): 從此已下。後世文中。^⑧第二經文。前品以明^③上品弟子。持經功德。此品中明

P.4567_45(25): ^⑧下品弟子。持經功德。現在遵三品。未來離爲五品。皆是爲物離合

P.4567_46(26): 不同。此品之中分前品中。^④中下二品以爲^{(b)⑤(59)}四品。一。^③名隨喜。第二。^⑤故往

P.4567_47(25): 聽經。第三。^{⑥(60)}分坐令坐。第四。^④勸人聽往。四中^④初者。聞說壽量發生正

P.4567_48(24): 信。從聞憶持欲^[敬]此理。^⑥名隨喜也。四人之中。此最在初。故得品⁽⁶¹⁾

P.4567_49(25): 名。說此品中凡有二文。^(a)第一。從⁽⁶²⁾初已下。長行及偈。^[?]同隨喜下弟子

P.4567_50(25): 功德多少。彌仰請如來也。^(b)第二。從⁽⁶³⁾佛告已下。訖於品末。如來爲^[辨]○

P.4567_51(25): ^(b)四品。⁽⁶⁴⁾弟子持經之德多。之以少彌勒。上問言但請初意通四。故下

P.4567_52(25): 如來通爲四人。^(a)彌勒白佛善男子女人來世。若從二依。聞經生信

P.4567_53(24)：隨喜知得福機何。所以問者。欲令佛答得福無量使來世受學^[後]

P.4567_54(27)：之。從於二依所依咸請生信也。^[?]^(b)若比丘等者。正是下品弟子也。

至第五

P.4567_55(28)：十人。最是不如。凡有二義。^①一者。明去坐已遠說者。不明聖心微薄⁽⁶⁵⁾得理尠

P.4567_56(24)：少。^②二者。欲明唯能自行不能化物。故不如。⁽⁶⁶⁾……前前者。皆具自行外

P.4567_57(25)：化是以勝。從此不如。聖心雖微。⁽⁶⁷⁾格量施福不相此況。何以而然。欲

P.4567_58(24)：明此信。乃於法身眞極理中。生此微解。爲因後必成佛。起生離

P.4567_59(26)：○但然是勝……⁽⁶⁶⁾。明此施福。^①一但資形生○不絕。^②二唯是法唯^[必]扁三界。俱

P.4567_60(24)：無遠致所化。旣微化功亦薄。故不如也。故云。百分千分不及其

P.4567_61(25)：一。所以但言第五十者。欲明內凡有其五品。外凡位中十人爲也。^[?]

P.4567_62(24)：亦有五品。故但言五十。^{④(68)}何況最初於會中聞者。欲明^⑤初人。從二

P.4567_63(15)：依聞說。說者。辭方聽則心重。故最勝也。

P.4567_64(22)：^⑥從⁽⁶⁹⁾^[阿]何逸多若人爲是經故已下。訖及乘天宮。^⑦第二品人。前

P.4567_65(21)：者過行值經則聽。此人發蒙修修身未帶。^⑧故往聽經。勝

P.4567_66(24)：其前人本能^[?]形四體馳身纂足有此自行未成佛聞○得華^[感]

P.4567_67(16)：報足不近地。故云。僞馬車乘及乘天宮也。^[象]

P.4567_68(23)：^⑨從若復有人於講法處已下。訖所坐之坐。^[跌]^⑩第三品人。欲明此

P.4567_69(25)：人亦^⑪往聽經兼復伏坐容人勸聽其功轉勝因行。旣精華報亦妙。

P.4567_70(25)：故得梵王所坐之處。^⑫從⁽⁷⁰⁾若復有人語餘人言已下。訖信受教誨。

④第

P.4567_71(25)：四品人。此人本能即顏許辭勸化他人。令往聽法彼我兼濟益物^[?]

P.4567_72(16)：所得華報無不稱意且道色纂論心亦勝。

P.4567_73(24)：◎從⁽⁷¹⁾阿逸多汝且觀是已下。○◎勸下依起於後品。欲明上來四品

P.4567_74(22)：弟子⁽⁷²⁾得理處微。受持轉教功德尙多。況復下依得理處深。

P.4567_75(23)：未來流通教化前人功德。俱然廣六無量益物既多。下依未

P.4567_76(24)：來何得不說化於未聞。●自下偈中略不預。^[頌]上彌勒請問初。有九

P.4567_77(26)：偈頌。上◎第一品人。^④從⁽⁷³⁾若有勸一人已下。有五偈頌。上^④第四
品人。^⑤從若

P.4567_78(24)：故諸僧房已下。有兩偈頌。上^⑥第二品人。◎若於講法處。一偈頌。
上

P.4567_79(18)：^(c)第三品人。◎示後一偈頌。◎勸下依也。法師功德品

P.4567_80(24)：從此已下。後世文中。◎第三文。⁽⁷⁴⁾……上品已明上依功德。此品中
明◎下

P.4567_81(23)：依功德。上分別品中。明上依⁽⁷⁵⁾通經化物德⁽⁷⁶⁾如⁽⁷⁷⁾虛。此明下依
通

P.4567_82(23)：化益物。卽身得彼⁽⁷⁸⁾六根現報。此是⁽⁷⁹⁾⁽⁸⁰⁾性地^[?]物依大士。積劫
行實

P.4567_83(22)：道善理⁽⁸²⁾冥資。先已亦能見聞彰⁽⁸³⁾外未⁽⁸⁴⁾好明了宣通法華。眞

P.4567_84(23)：實極理妙⁽⁸⁵⁾實。資六根清徹。過⁽⁸⁶⁾昔所得此文。乃是說益進德……⁽⁷⁴⁾。
就

P.4567_85(24)：此品中凡有二文。^(a)第一。從⁽⁸⁷⁾初已下。訖皆令清淨。明下依持
經。總

P.4567_86(22)：道得其六根清淨。^(b)第二。從是善男子已下。訖此品末。離明

P.4567_87(24)：六根所得功德。今言八百千二百者。一方說也。⁽⁸⁸⁾涅槃經中明彼

P.4567_88(24)：四依。解有淺深。判爲十六。今此經中明持經人。所得功德分爲

P.4567_89(25)：千二百。⁽⁸⁹⁾舊經中明六根俱皆等得千二百。羅付師法共先儒許量

P.4567_90(25)：推根功用其多少也。由彼持經獲千二百。善資修行者。人說既

六朝古逸『法華經疏』の同本離片に関する一考察（金）

P.4567_91(26)：勝故根。亦釋妙言千二百者。說⁽⁹⁰⁾十善。上作⁽⁹¹⁾⁽⁹²⁾○^[自]白行十善。

○教人行十善。○見

P.4567_92(26)：行十善。○起隨喜心讚嘆行十善者。并爲⁽⁹³⁾卅善。一中義應復有其^[具]十。如⁽⁹⁴⁾

以上、[P.4567] の翻刻を終える。

6-2 [北図 BD06196 (暑70)] の翻刻

BD06196_P.01_01(24)：⁽⁹⁵⁾似起不然心時。⁽⁹⁶⁾但念其善不念然生。亦復不念其餘九惡。起餘

BD06196_P.01_02(24)：九善義亦同。或亦可善理相資一善生十。以此推之一念各有^[?]

BD06196_P.01_03(23)：十。更有四百現在法。○^[能]觀其境界。有其四百過去未來。此智

BD06196_P.01_04(23)：境界。復有四百。總明八百離其過未。明千二百。亦可善心起。

BD06196_P.01_05(28)：則有其上中下別三品之異。故有千二百。所以皆味在。⁽⁹⁷⁾……舌變者。明食資身。

BD06196_P.01_06(23)：要待破質。得味成身。故道變也。餘塵不須故質○^[劉]獲成身資

BD06196_P.01_07(24)：用。故不言變。依如今解。三根塵到。三根玄囑。今明下依^[?]性地大

BD06196_P.01_08(24)：士入但積德經力勳修斯皆玄囑……⁽⁹⁷⁾。故言。⁽⁹⁸⁾遙聞是衆香。⁽⁹⁹⁾地中伏藏

BD06196_P.01_09(18)：金銀等寶。悉皆聞知。此是通之興爲也。不輕品

BD06196_P.01_10(27)：從此已下。後世文中。^⑩第四文也。自上已來。明聽說⁽¹⁰⁰⁾

二人受持流通功德

BD06196_P.01_11(23)：無量。時衆情遲未往深信故。從此已下。^①如來親爲列已爲證。

BD06196_P.01_12(21)：我曾過去受持流通。師及弟子俱得三報。勸厲上來聽

BD06196_P.01_13(25)：說二人。彌應勸加受持流通。故此品文起。就此品中大判凡有三

BD06196_P.01_14(23)：文。^(a)第一。從⁽¹⁰¹⁾初已下。訖號之爲常不輕。^(a)列不輕行之處。^(b)第二。

BD06196_P.01_15(25)：從⁽¹⁰²⁾是比丘臨欲終時已下。訖能令至於三菩提。^(b)明其二人受持流

BD06196_P.01_16(21)：通俱得三報。^(c)第三。^(b)從是故已下。訖至偈來。^(c)結勸二人也。

BD06196_P.01_17(26)：就^(a)初段中復有二文。^(a)第一。從初已下。訖增上慢比丘有大勢力。^(a)列其

BD06196_P.01_18(23)：不輕行行之處。^(b)第二。從爾時有一菩薩已下。訖號之爲常不

BD06196_P.01_19(22)：輕。^(a)列不輕名也。⁽¹⁾從品初已下。訖身意清淨。如來持欲引證

BD06196_P.01_20(25)：來勸故。先列其信謗二人善德之禾。先列毀持經人得其罪報。獲

BD06196_P.01_21(25)：大罪報如前所說者。亦如譬喻品末訖也。所得功德如向所說者。

BD06196_P.01_22(26)：如法師功德品也。^(a)從乃往古昔已下。正明處也。說中亦明威音如來

BD06196_P.01_23(27)：一應出世。先三後二文顯易知。所以乃列二萬億佛者。欲道不輕皆在

BD06196_P.01_24(26)：爾許佛法之中行行化物。但列初一餘者可知。^(a)有一菩薩

已下。判其⁽¹⁰³⁾

BD06196_P.01_25(25)：名也。聖人施作各自不同。自有說法師而益物者。自有神通而益

BD06196_P.01_26(25)：物者。此段衆生要精禮拜方能入道。^[請]方便品中五千人等。如來便

BD06196_P.02_27(24)：以戒德遺之。此等諸人便與彊說。令其^[證]○受當知。皆是隨物化

BD06196_P.02_28(24)：宣也。汝等皆行菩薩道者。明其因一。當得作佛。明其果一。此文

BD06196_P.02_29(23)：卽此流通法華義已教足。^(b)從臨欲終時已下。品之^(b)第二。^(b)明其

BD06196_P.02_30(25)：持經聽說二人俱得三報。^④從初已下。訖廣爲人說是法華經。明其

BD06196_P.02_31(25)：法師由前化人更得聞法。卽便獲得六根現報。就中有二。
①一得根

BD06196_P.02_32(24)：淨。是其色報。^②二便近壽。是其命報。^⑤從於時增上慢四衆已下。訖

BD06196_P.02_33(25)：皆悉信伏隨從。明其弟子上蒙菩薩。^[?]彊爲說法一音聞耳。以之爲

BD06196_P.02_34(25)：因令得重聞聖人說法生信伏^[隨]從。卽是^[現]親報。^⑥從是菩薩復化千萬

BD06196_P.02_35(20)：億衆生已下。訖心無所畏。明師流通得其生報。^④從得

BD06196_P.02_36(24)：大勢是常不輕菩薩^[摩]訶薩已下。訖疾得三菩提。明師流通得

BD06196_P.02_37(27)：其後報。於意云何。不輕菩薩^[歎]豈異人乎。所以結會古今者。兼○下依如來

六朝古逸『法華經疏』の同本離片に関する一考察（金）

BD06196_P.02_38(28)：道已親自過去流通。此經已獲大○^[疾]得三^[善]菩提。下依未來何得不說化彼

BD06196_P.02_39(25)：未聞。◎從彼時四衆已下。訖受大苦惱。明弟子生報。所以乃明不善

BD06196_P.02_40(28)：者。正欲厲勸未來諸人加毀。法師得大重罪加毀。既罪供養俱然說得大

BD06196_P.02_41(25)：福德。若如此者未來云何得。不正其謗惡興其供養意勸持經故

BD06196_P.02_42(24)：以惡形善耳。①從畢是^[罪]已已下。訖不退轉者是。明弟子持經得其

BD06196_P.02_43(24)：後報。^{(c)③}從^[知]當和者是法華經已下。品之^(c)第三。^(c)結勸二人。^[?]勸二人

BD06196_P.02_44(24)：受持流通○^[?]舉經理深來勸之耳。莫謂虛言。我於過去身自流

BD06196_P.02_45(24)：通。得三菩提弟子奉行。今日得作法身菩薩理。若不深何能許

BD06196_P.02_46(27)：益。故云。是法華經大饒益菩薩。能令至於三菩提也。
◎從是故已下。正是

BD06196_P.02_47(25)：^{(c)③}第三。^(c)結勸二人。是以師及弟子流通奉持經理津益得三報義。故

BD06196_P.02_48(25)：如等得未來。云何得不勸加○^[禁]進受持流通。故云。①菩薩於如來滅

BD06196_P.02_49(20)：後常應受持讀誦者。勸其弟子。②解說書寫。勸其師也。⁽¹⁰⁴⁾

BD06196_P.02_50(28)：●自下偈中還頌上文。今此偈中略不頌。上品初舉彼二人善惡報相。^{(a)③}初一

BD06196_P.02_51(29)：偈半頌。上^[行]不輕化行之處。⑤從⁽¹⁰⁵⁾是佛滅後已下。凡有

四偈頌。上^{〔列〕}○不輕名。^⑤從爾

BD06196_P.03_52(27)：時有一菩薩已下。訖號之爲常不輕。^{⑤⑥}從其罪畢已[△][下]。

兩偈頌。上師之現

BD06196_P.03_53(27)：報。^⑥從臨欲終時已下。訖說是法華經。^⑥從諸著法衆一偈頌。上弟子現報。

BD06196_P.03_54(28)：^⑥從於時增上慢四衆已下。訖信伏隨從。^⑥[從]不輕命終一偈頌。上師之生報。^⑥從

BD06196_P.03_55(26)：是菩薩復化已下。訖心無[所]畏。^④漸具功德一偈頌。上師後報。^④從得大勢

BD06196_P.03_56(27)：已下。訖疾得三菩提。^⑥中略不頌。上弟子生報。^④從時四部衆已下。五偈頌。

BD06196_P.03_57(28)：上弟子後報。^④從畢是罪已[已]下。訖不退轉者是。^⑥從億[△]億萬劫已下。兩偈頌。上

BD06196_P.03_58(29)：^⑥舉經理深來勸二人。^{⑥⑦}從當知是法華經已下。訖三菩提。^①億億萬劫一偈。導經

BD06196_P.03_59(26)：難聞。^②次有一偈。導經難說。^⑥從是故行者已下。盡偈頌。上^⑤是故諸菩薩

BD06196_P.03_60(25)：已下。說長行也。^①初一偈。勸其弟子。成經難聞。^②末後一偈。勸其法師。

BD06196_P.03_61(20)：成經難說耳。 神力品 從此已下。經之大段。^{①①}第四流通

BD06196_P.03_62(27)：文也。上來廣明因過果二理訖之於上。自下如來得欲本付二依。囑通

BD06196_P.03_63(29)：退代。^{〔？〕}彼異世同風。^{①⑥①}法輪不絕。故有此一段文興。就中大判凡有三文。^⑧第一。神

BD06196_P.03_64(29)：力一品。如來欲付囑二依。是故先^⑧現五種瑞相以之爲序。

③第二。囑〔藏〕嚀一品。正

BD06196_P.03_65(27)：明^{〔藏〕}如來口自戒勅。③第三。從藥王已下。訖於經末。教作未代^{〔藏〕}流通法用。事

BD06196_P.03_66(28)：相^{〔？〕}奇稱之爲神。理處汝能名之爲力。故名神力品。就此品中凡有四文。

BD06196_P.03_67(24)：^(a)第一。從⁽¹⁰⁷⁾初已下。訖而供養之。明^(a)踊出菩薩請求流通。^(b)第二。從⁽¹⁰⁸⁾爾

BD06196_P.03_68(29)：時世尊已下。訖如一佛土。如來廣^{〔？〕}現五種瑞相以之爲序。^(c)第三。從⁽¹⁰⁹⁾佛告上行

BD06196_P.03_69(17)：菩薩已下。訖宣示顯說。明^(c)經理深。勸其流通。

BD06196_P.03_70(30)：^(d)第四。從⁽¹¹⁰⁾是故汝等於如來滅後已下。訖於長行。^(d)結勸二人。受持流通。^(a)此諸菩薩

BD06196_P.03_71(29)：在^(e)踊出品中求此土流通。今明其人復求他方流通。此經者。所在國土滅度

BD06196_P.03_72(29)：之處。廣說此經。所以。此人求流通。者何。欲明此經理深旨遠益物處大。能弘

BD06196_P.03_73(16)：通者。彼我兼利。故云。眞淨大法受持讀誦。

BD06196_P.03_74(28)：^(b)從爾時已下。^(b)第二文也。就中凡有^(b)五種力。^(d)第一出廣長舌。○以現舌相者。⁽¹¹¹⁾

BD06196_P.03_75(27)：凡有二義。⁽¹⁾一明舌至於梵天者。必有○蔭欲畏一乘法身之理。必能蔭

BD06196_P.03_76(26)：蓋有緣群生。⁽²⁾二明世人若能吐舌至鼻端者。必不忘語。欲表明如來

BD06196_P.04_77(24)：令肘一乘法身理實不虛。⁽³⁾第二放光。所以放毛孔光者。欲明此

BD06196_P.04_78(27)：光無虛不有表令所說因果之理理亦其足。又復光本除昏顯

像令人

BD06196_P.04_79(27)：觀見。欲令二依在於未來流通。大乘枝於一物天下同見。^[彼]^[?]
故照十方也。

BD06196_P.04_80(25)：寶樹下佛所以出舌放光明者。欲表明諸佛同心明理處。卽
短以

BD06196_P.04_81(24)：顯長。非卅九年分別百千歲。不異丈六更有法身。欲令二
依應

BD06196_P.04_82(08)：宣此理^[彼]伎物識知也。

BD06196_P.04_83(25)：◎第三。^[響]^[彈]磬欸禪指出二音聲。世人^[響]磬欸通^[?]暢心句表明。如
來從昔已

BD06196_P.04_84(24)：來一乘^[?]法身隱而不彰義似推塞今日如鄣聖心得暢。欲^[彼]洩二

BD06196_P.04_85(25)：依^[?]於聖心化^[彼]未聞。世間彈指必有所契表明。所說一乘
法身

BD06196_P.04_86(26)：契於聖心。^[彼]欲洩二依仰識聖心宣通化物。亦可^[響]磬欸彈指爲
覺悟物。

BD06196_P.04_87(20)：欲彼二依應宣大理悟於未聞。◎第四。動地^[?]現示序伏

BD06196_P.04_88(26)：相。欲令二依以此大乘。彼及未聞除其別^[?]彊得^[方]解。

◎第五。從其中

BD06196_P.04_89(28)：衆生已下。訖^[?]如一佛土。名十方欽敬。欲令二依以此大乘
法身之理化枝^[彼]

BD06196_P.04_90(30)：群生彼十方有緣同欽此理以所如來神。^[?]欲彼十方衆生見此
佛土聞經名者。

BD06196_P.04_91(26)：令生做信未化。則易十方有緣既觀如來聞經名字發心。莫
已興三

BD06196_P.04_92(26)：乘供養捨。則仰施所以衣物。從十方來。變成寶帳者。正
欲表明⁽¹¹²⁾⁽¹¹³⁾萬善

BD06196_P.04_93(28)：同歸理無異趣。此相已彰因果俱一。欲令二依傳通。此理
化枝^[後]示聞。十方

BD06196_P.04_94(28)：世界。如一佛土者。欲表一乘法身之理。除其⁽¹¹⁴⁾三乘文
六。生滅擁得之怛。亦

BD06196_P.04_95(26)：彼通之化未聞也。^(c)從爾時佛告上行等已下。品之^(c)第三。
正明如來親

BD06196_P.04_96(26)：自^(c)口告舉經理深以歎二依。諸佛神力不可思議者。神力
相玄下人

BD06196_P.04_97(25)：莫^[總]○。故云。無量不可思議。若我以是神力者。舉上五種
神力爲囑

BD06196_P.04_98(26)：○。故^[總]○無量劫以神力。說此經功德猶不^[過][能]盡也。所以
而然。欲明此○^[總]○⁽¹¹⁵⁾

以上、[北図 BD06196（暑70）]の翻刻を終える。

6-3 [S.2439]の「藥王品」までの翻刻

S.2439_P.01_001(27)：○^[?]○^(194c07)○⁽¹¹⁶⁾究竟教亦備之理。而言之不過身爲眞。應教爲權
實。此經備明。故知

S.2439_P.01_002(28)：理深。說不盡也。此長一中明經功德說示於盡。下偈中導
流通之人^(194c10)功德

S.2439_P.01_003(27)：不盡綺事說也。爲乘^[?]○⁽¹¹⁷⁾示者大意。正明流通經人德不盡
耳。不欲明經所

S.2439_P.01_004(27)：以。舉經者德備。由經故導也。以要言^[之]者。欲明如來
德乃無量。爲明四義

S.2439_P.01_005(28)：故稱要也。四者是有。⑥如來一切所有之^[法]者。此句欲明
舉手低頭。皆第一理。

S.2439_P.01_006(27)：此^(194c15)是第一。明其⁽¹¹⁸⁾教實。⑥如來一切自在神力者。是

第二。明形方便。則短顯

S.2439_P.01_007(26)：長必求應道。即長明短分傷眞極。^[?]明自在神力也。◎如來一切祕要之

S.2439_P.01_008(27)：藏者。此是第三。^[?]所乘方便。^{[?][正]}如來爲物分齊亡不求其一。
④如來一切甚深

S.2439_P.01_009(24)：之事者。至極法^(194c20)身雖復爲物權生脫滅眞身。⁽¹¹⁹⁾然無其遷變。此是

S.2439_P.01_010(27)：第四。身眞⁽¹²⁰⁾實也。此經備明⁽¹²¹⁾[-]切。言皆於此經宜示^[順]欽說。^(d)從是故已下。品之

S.2439_P.01_011(31)：^(d)第四。^(d)結勸二人。是以此⁽¹²²⁾經理深益物^[處]大。故汝未來不得不說爾時。故言。於如來滅^{[分][?]}

S.2439_P.01_012(27)：後應一心受持讀誦。^(194c25)勸其弟子。解說已下。勸其師也。從所在國土已下。

S.2439_P.01_013(27)：正舉理深並勸⁽¹²³⁾二人。說經之處。卷所住處。皆應於中起塔供養重經故

S.2439_P.01_014(27)：也。所以者何已下。便持所以。此中非是生處得道。便轉法輪處般處。而

S.2439_P.01_015(25)：起塔者何。若外識知爲弘一乘^(195a01)供養法華造此塔者。乘理⁽¹²⁴⁾開心解^[?]

S.2439_P.01_016(24)：生或滅萬行滿足。得道之處持其經旨。即轉法輪處。知聖應遷。

S.2439_P.01_017(25)：即涅槃處。●偈中之明不頌。品⁽¹²⁵⁾初^(a)第一。諸^(a)菩薩請求流通。^(b)初有三偈

S.2439_P.01_018(27)：頌。上^(b)第二。^(b)五種^(195a05)瑞相。就中但頌。④舌相。⑤放光。
⑥磬欬彈指。⑦動地。第五。⑧十方欽^[響]

S.2439_P.01_019(26)：敬。略而不頌。身放無數光者。欲明衆生根感萬差應亦非^{[戒][晃]}

一。^{(c)(126)}從以[佛]滅

S.2439_P.01_020(27)：⁽¹²⁷⁾度後已下。十一偈半頌。上^(c)第三。^{(c)(128)}口告舉經理深以
勸二依。^④初有三偈。正

S.2439_P.01_021(27)：是頌上持經之人功德彌大。^{⑤(195a10)}從能持是經者已下。廣嘆
功德無量勸令

S.2439_P.01_022(28)：弘經。則爲[已]見我。欲明三以佛眞極理用之爲體悟理在
心名見也。佛亦可

S.2439_P.01_023(28)：隨刑不離聖故恒見也。若能末世^[?]⁽¹²⁹⁾通經化物不但見佛。亦
復⁽¹³⁰⁾⁽¹³¹⁾冥順卽法供

S.2439_P.01_024(28)：養。^⑥從於諸法之義已下。四得。上明^(195a15)自行。從此已
下。明其外化經理資益具

S.2439_P.02_025(26)：^[?]曰無礙便能稱根導利群生。滅惡生善。故云。行世間。能
滅衆生闇。卽

S.2439_P.02_026(26)：是滅惡教化。已下明具生善經益既^[?]⁽¹³²⁾大。二依未來不得不
勸宜通後

S.2439_P.02_027(20)：代。^(d)從是故已下。一偈半頌。上^(d)第四。^(d)結勸二人。^(195a20)
囑累品

S.2439_P.02_028(29)：從此已下。後世文中。^⑧第二文也。如來親自口告付囑。此
明如來以此大法付

S.2439_P.02_029(29)：諸菩薩。惡世宣通。卽是菩薩累重之事。二者欲使^[彼]二依。
在於未來。宣通此經。

S.2439_P.02_030(30)：^[彼]使累世不絕。故言囑累^(195a25)品。就此品中凡有四文。^(a)第
一。從⁽¹³³⁾初以下。訖普得聞知。欲

S.2439_P.02_031(25)：明^⑨如來口自慇懃誠勸二依。^(b)第二。從⁽¹³⁴⁾所以者何已下。
訖諸佛之恩。

S.2439_P.02_032(25)：欲明如來^(b)勸彼二依。流通之時。應彼二依。通化之時。應

^[扮]○^[?]佛成頌。

S.2439_P.02_033(24): ^(c)第三。從⁽¹³⁵⁾時諸菩薩已下。訖願不^(195b01)有慮。明諸菩薩敬諾施行也。^(d)第

S.2439_P.02_034(27): 四。從⁽¹³⁶⁾⁽¹³⁷⁾^[廣]命時釋迦已下。訖於長行。明此如來說經也。訖。^[?]唱散隨意。^(a)以右手

S.2439_P.02_035(25): 摩無量菩薩頂者。明其一手及於衆頂。亦是神力隱其神力存口

S.2439_P.02_036(26): 告之名。^(195b05)我於無量修集是難得三菩提者。欲明如來因地之時。修行

S.2439_P.02_037(26): ^[?]曠劫修因。方始剋得法身其果。故云。難得。如來欲以此之大法與物

S.2439_P.02_038(29): 同證故付二依。傳化來聞使千載不墜。故云。汝汝當一心流布此法。廣令增

S.2439_P.02_039(27): 益也。令一切衆生^(195b10)普得聞知。^(b)從所以者何已下。品之^[?]^[體]
^(b)第二。^(b)勸彼二依。○

S.2439_P.02_040(28): ^[?]佛成頌。所以。汝等未來之世能流通。者何。要當學佛四種之法。^(a)一明如來

S.2439_P.02_041(26): 有大慈悲。^(b)二明如來無諸慳悋。^(c)三明如來應機授法。故云。無所畏。^(d)四

S.2439_P.02_042(29): 明如來是諸衆生之大施主。^(195b15)若能修持如來四法。便能惡世流通此經。故云。

S.2439_P.02_043(26): 亦應隨學如來之法勿生慳悋。^(a)從於未來世若男子女人已下。勸其

S.2439_P.02_044(26): 二依相。根授法有大根者。爲說其一。故云。信如來智慧者當爲演說

S.2439_P.02_045(26): 此法華經。^(b)從若有衆生已下。明根小之^(195b20)人。爲說三

六朝古逸『法華經疏』の同本離片に関する一考察（金）

乘。故云。餘深法中

S.2439_P.03_046(25) : 示教利喜。⁽¹³⁸⁾經師尋此經文廣說法華。當是空中{所}前以得知。從上

S.2439_P.03_047(22) : 已來未曾有起。此中始言。從法生起摩頂付囑以此驗知。^[?]

S.2439_P.03_048(19) : 藥王品^{(195b25) (139)}裏從此已下。訖於經末。後世文中。大段[◎]第

S.2439_P.03_049(27) : 三。教二依。未來之世[◎]流通法用。然二依大士豈將聖教文。於流通欲

S.2439_P.03_050(25) : 對二依。^[?]該於始學乘世之中苦行流通。當如藥王權道普入當如

S.2439_P.03_051(26) : 妙音觀音。說呪擁護。如陀羅尼。藉善知{識}。^(195c01)妙莊敬作善⁽¹⁴⁰⁾智識如淨

S.2439_P.03_052(27) : 藏等也。勸發二人如似普{賢}⁽¹⁴¹⁾○。^[?]以此證便故引文在此也。若論次第應

S.2439_P.03_053(27) : 在{不}輕後安。就此品中凡爲⁽¹⁴²⁾七文。^(a)第一。從⁽¹⁴³⁾初已下。訖聞皆歡喜。將明藥

S.2439_P.03_054(25) : 王本苦行事。故^(195c05)宿王華說請其佛說。^(b)第二。從⁽¹⁴⁴⁾佛告已下。訖以⁽¹⁴⁵⁾爲供

S.2439_P.03_055(23) : 養。明期藥王苦行流通之處。^(c)第三。從⁽¹⁴⁶⁾爾時彼佛如^[爲]一切衆生

S.2439_P.03_056(24) : 已下。訖其福最多。正明藥王現在未來燒身⁽¹⁴⁷⁾譬苦流通。所以乃

S.2439_P.03_057(25) : ⁽¹⁴⁸⁾導。爾時彼佛爲一切衆生。說法華經者。欲明○^[?]^(195c10)見莊嚴法中流通

S.2439_P.03_058(22) : 法華蒙經理益。卽時獲得色身三昧荷佛恩重。并袍經澤

S.2439_P.03_059(25) : 故。盡財命以供養之故。以此苦行彰經理深。得弘法華。

故云。我今

S.2439_P.03_060(24)：當供養日月淨明德佛及法華經。不如以身供養。若欲明此
中

S.2439_P.03_061(24)：一段衆生應見燒身^(195c15)喪命報經發道處多。故言。不如以
身供養

S.2439_P.03_062(24)：也。欲明捨身亦是捨財。云何道言眞法供養。但自悟道不
同。要

S.2439_P.03_063(23)：燒身得解大乘爲通大法故便捨身。故言。眞法供養之耳。
如

S.2439_P.03_064(24)：似香積因聞香故得解大乘也。第一〔之〕施者。財施養形爲
下。^(195c20)因財

S.2439_P.03_065(25)：通小乘爲中。今日因財通大乘法爲上。故言。第一。千二
百歲。身乃

S.2439_P.03_066(23)：盡⁽¹⁴⁹⁾者。衆生滅盡應身則遷此之燒⁽¹⁵⁰⁾譬則燒欲伏還伏。當
知大

S.2439_P.03_067(23)：士有物不同隨根隱顯耳。不欲明指福多欲導燒指傷筋傷

S.2439_P.04_068(24)：骨難而能爲其功則大。若能持經^(195c25)功過於此。以劣形勝。
⁽¹⁵¹⁾正明經

S.2439_P.04_069(24)：深理勸人流通。^(d)第四。從⁽¹⁵²⁾宿王〔華〕譬如一切川流已下。
訖此經能救

S.2439_P.04_070(26)：一切衆生〔者〕已來。正明此經理深。言遠益物處多出過餘
經二依未來

S.2439_P.04_071(30)：應當流通。^(e)第五。從⁽¹⁵³⁾此經能救一切衆生者已下。訖所
得功德亦復^(196a01)無量。上明理

S.2439_P.04_072(22)：深。何以得知。下明此經能除物患利益無量證知深理也。

S.2439_P.04_073(27)：^(f)第六。從⁽¹⁵⁴⁾若有人聞是藥王菩薩本事品已下。應當如是

⁽¹⁵⁵⁾生恭敬心。付囑

S.2439_P.04_074(29)：此品並勸二人。在於末代受持流通。^(196a05)從若有女人聞是
品能受持者。先勸弟

S.2439_P.04_075(26)：子未來應當勤加聽受。從若如來滅後⁽¹⁵⁶⁾後五[百]歲以下。
勸其法師流通

S.2439_P.04_076(19)：彼物。從初已下。明其滅惡。故云。不復爲貪欲所惱。

S.2439_P.04_077(26)：從得菩薩神力已下。明其生善。從是時諸佛已下。廣明諸
佛嘆^(196a10)持經

S.2439_P.04_078(28)：人德行深遠。從是故宿王華已下。正勸法師當於⁽¹⁵⁷⁾未來通
經益物。從宿王[華]

S.2439_P.04_079(26)：汝若見有受持是經已下。勸彼弟子未來應當供養法師諸求
大法。

S.2439_P.04_080(20)：從是[故]求佛道者已下。結勸供養。^(*)第七。從⁽¹⁵⁸⁾說是藥
王品已下。明當時

S.2439_P.04_081(21)：之益。^(196a15)妙音品 其人乃法身大士先應東方。此
土有緣放⁽¹⁵⁹⁾

以上、[S.2439]の「藥王品」までの翻刻を終える。

7 結 語

本疏に関する研究に限らず、この研究分野に関しては、日本では平井有慶教授による、中国では方廣錫博士による注目すべき研究成果が発表されている。しかしながら両者は互いの研究成果を参照することなく、それぞれが独自に研究を進めてきたのである。

このことは、言葉どおり大変な労力を必要とする本研究分野にとって、あまりにも消耗的なプロセスを増やすばかりではなく、研究の進展や発展のためにも、大変大きな損失であると言わざるを得ない。

さて本稿では、六朝古逸の『法華經疏』と知られていた [P.4567]、[暑70]、[S.2439] の三つの写本に対する、両者のそれぞれ異なる見解を総合的に検討し、それに新たなる筆者の見解を加えることによって、この三本が同本離片である、合理的な論拠を提示したのである。

2007年にフランス国立図書館にて [P.4567] を実見して以来、実に5年もの歳月を経て、ようやくこの研究成果を世に発表することができたのである。

それは本疏ならではの特殊な事情によるもので、本疏は同じ同本離片であっても、旅順博物館蔵の [LM20_1467_28_03] と大谷探検隊将来本の「佛典 (51)」のように⁽¹⁶⁰⁾、切断部分を接合してみることによって容易に同定できる同本離片とは性格を異にするため、これが思いのほか研究に長期間を要する結果を招いてしまったのである。

以下、本疏に対する残された研究課題についてまとめておきたい。

- ①本疏の著者は不明であるが、今のところ散逸法華章疏の科段及び逸文と、本疏のそれとを対比することによって、これが慧龍、僧印、劉虬でないことが確認できた⁽¹⁶¹⁾。また、治城寺素法師との関連性が窺われることを指摘しておく⁽¹⁶²⁾。さらに「藥王品」の冒頭において記される「襲」の字についても注目せねばならない⁽¹⁶³⁾。ちなみに本疏において特定できる人名はわずかに「羅什」(P.4567 189) 一人のみである。
- ②同本離片であることを判定するための、筆跡、形状、注釈形式、分科といった比較要素に加えて、筆者によって解明された本疏に対する写経グループの存在をも考慮しつつ、引き続き同疏や同本離片（「分別功德品」以前）を蒐集し、一具を揃えること。なお、[玉26]、[P.3308]（利都法師釈）の二本は、同疏・同本離片の可能性がある。
- ③その後当然のことながら、残されるべくして残されている本疏の内容の質について問わなければならない。

これからも不思議なる仏縁を大切に、導かれるがままに、惹かれるがままに、

邁進してきた法華章疏の研究に従事していきたい。

（2012年8月31日稿）

〈註〉

- （1）詳しくは、（拙稿 [2008]）を参照されたい。
- （2）「イギリス、フランスに於て法華經調査（大英博物館、パリ国立図書館を訪ね、敦煌本法華經の調査に当る）。第一回 昭和四十二（1967）年七月より八月まで、第二回 昭和五十（1975）年八月より九月まで、第三回 昭和五十一（1976）年二月より三月まで」（立正大学仏教学会 [1980] pp.24-25）参照。
- （3）「International Dunhuang Project 國際敦煌項目」[<http://idp.bl.uk/>] 参照。
- （4）僧祥撰集（CE.VIII-）『法華傳記』卷第二の「晉京師龍光寺釋道生二」に「專志講法華經。著義疏二卷。」（T.51 no.2068 p.56a, 11.13-14）と、道生（CE.355-434）撰『妙法蓮花經疏』卷上に「又以元嘉九年春之三月。於盧山東林精舍。●又治定之。加採訪衆本。具成一卷。」【SZ.27 p.1 脚註③】「又字原本不明」（SZ.27 no.577 p.1b, 11.12-14）とある。引用文中、[…]・(=…)・下線・**太字**は筆者による。以下同様。
- （5）道宣（CE.596-667）撰（CE.645-）『續高僧傳』卷第五の「梁楊都光宅寺沙門釋法雲傳九」に「時人呼爲作幻法師矣。講經之妙獨步當時。」（T.50 no.2060 p.464a, 11.7-8）とある。
- （6）（花山信勝 [1933] pp.13-14, pp.49-55 注36）参照。
- （7）「本疏（＝[S.2439]）は前後を通じて他經論を引用せず、唯僅かに勸發品の第二十二行に他師の「一解」を引けるのみ。」（『解説』p.101）参照。
作者未詳・不知題『●法華經疏』『普賢品』に「第二殖衆德本者。初依大士五恒行道廣積萬行。故云。殖衆德本。亦可能解。一乘法身之理。能生萬德名爲本也。又復一解五恒行道是本也。今能流通卽是其德。」【T.85 p.194 脚註③】「◎大英博物館藏敦煌本, S. 2439, 首題新加」(T.85 no.2751 p.198a, 11.25-29・S.2439 p.9, 11.195-197) とあるがその出典は不明である。
- （8）「法身・眞極」については以下のような用例が目される。①『妙法蓮花經疏』卷下の「法師功德品」第十八に「考而論之。三千既然。十方有何異哉。斯則法身體極照也。」（SZ.27 no.577 p.15c, 11.24 - p.16a, 11.1）と、②僧肇（CE.384-414?）選『注維摩詰經』卷第七に「肇曰……又法華云。二乘中止終必成佛而此經以根敗爲論。無復志求。夫涅槃者道之眞也妙之極也。」（T.38 no.1775 p.392c, 11.21-25）と、③德清述『肇論略注』卷五に「故責之曰。若子之所云聖人云云者。豈不乖違於法身神極之理。傷於涅槃之玄妙旨趣者乎○下引經極成。」（SZ.54 no.873

p.358c, Ⅱ.1-3) と、④基 (CE.632-684) 撰『妙法蓮華經玄贊』卷第四本 (「方便品」) に「破別故名一者。二乘不知二爲方便。執二乘果以爲眞極。」(T.34 no.1723 p.714c, Ⅱ.25-26) とある。とくに吉藏 (CE.549-623) の場合は、⑤『法華玄論』卷第二において、『法華經』の宗旨を弁ずるにあたり、十三家の異説を挙げているが、そのうち第七師の説を評するなかに「第七師云既名妙法即以妙法蓮華爲宗。……評曰。尋此師學集出此^{*1}方。謂第八識自性清淨亦名性淨涅槃以爲妙法。既云是佛所得還是果義同前評^{*2}也。……皆云八識是妄識。謂是生死之根。先代地論師用爲佛性。謂是眞極。」【*1】「此→北」【*2】「第二家、龍師のことを指す。つまり第七師は廬山慧龍を受けていたということになろうか」(T.34 no.1720 p.380b, Ⅱ.18-19) とあり、⑥同卷第三には「又唯是一道三義説之。無境不照義故名波若。眞極無二義稱爲妙法華。常恒不變義目爲涅槃。」(T.34 no.1720 p.388b, Ⅱ.25-27) とある。また、⑦『大乘玄論』卷第四に「涅槃無累不盡名解脫。無境不照名波若。眞極可軌稱法身。故具於三德名爲涅槃。」(T.45 no.1853 p.52b, Ⅱ.24-26) とある。ちなみに、「眞極法身」については、⑧菩提流支訳 (CE.535・菩提流支の伝述か)『金剛仙論』卷第五に「故經言。是中諸人亦是金剛明處人則人尊也。又解此經所表即是眞極法身故。亦云則爲有佛也。」(T.25 no.1512 p.830b, Ⅱ.23-25) と、⑨惠龍写記 (CE.539)『維摩經義記』(=[S.2732]) 卷第四に「初明丈六體空。後辨眞極法身。此即除惑情二種執患。」(T.85 no.2769 p.350c, Ⅱ.14-16) とある。

※参考までに、惠龍というと「惠龍→僧印 (CE.435-499) →法雲 (CE.467-529)」という法華相承が知られているが、⑨『維摩經義記』の写記者惠龍とは同名異人であると考えられる。なお、廬山慧龍については、慧皎 (CE.497-554) の『高僧傳』卷第八 (T.50 no.2059 p.380b)・吉藏の『法華玄論』卷第一・二 (T.34 no.1720 p.363c, p.379c) に詳しい。

- (9) 『法華經疏』(=[S.2439]・本疏の)「神力品」に①「即長明短分傷眞極。明自在神力也。」(T.85 no.2751 p.194c, Ⅱ.16-17・S.2439 p.1, Ⅱ.7) と、②「如來一切甚深之事者。至極法身雖復爲物權生脫減眞身。」(T.85 no.2751 p.194c, Ⅱ.19-20・S.2439 p.1, Ⅱ.8-9) と、③「欲明三以佛眞極理用之爲體悟理在心名見也。」(T.85 no.2751 p.195a, Ⅱ.11-12・S.2439 p.1, Ⅱ.22) とある。
- (10) 「33-I 法華經疏 (擬題) 大正藏經八五の一九四——一九九 スタイン本 (S. 2439)。首末破欄の失題殘卷なるも、什譯、『妙法華』神力品長行の後部より勸發品の大半に互る疏文たり。普門品重頌の疏釋を缺くこと、前出疏(=[S.2463]) に同じ。書體釋風俱に六朝時代の古疏にして、恐らく北魏の未傳或は古逸疏か。憾むらくは撰者の名を審にせず。」(『解説』 pp.100-101) 参照。
- (11) 「古逸部、疑似部が藏經に加えられたのは、大正5年(1916)以來、矢吹慶輝

六朝古逸『法華經疏』の同本離片に関する一考察（金）

氏がイギリス大英博物館所蔵のスタイン蒐集敦煌文獻の調査研究に従事され、藏經未傳の佛典の探索に努められた結果、約200點、6000餘葉にのぼる寫眞撮影の許諾を得、財團法人啓明會の補助を得てわが國に將來されたことによるものであり、……藏經第85卷の古逸部、疑似部の刊行は、矢吹氏の『鳴沙餘韻』が公にされてから2年後にあたる昭和7年（1932）6月のこと」（『T.in』45, p.3）参照。

- (12) 詳しくは、「**【表4】**各品の冒頭の定型句」参照。
- (13) 「108 法華經疏 **【T・N：144MF 所収の典籍の前に置かれているカードに記入されている通し番号の事】** 108：6196 **【千文字：劫餘錄に記されている中國式分類様式】** 暑70 **【劫P：陳垣編『敦煌劫餘錄』の葉數の事】** 359A **【寶P：黃永武主編『敦煌寶藏』の卷數及び典籍の載せられている最初のページ數の事】** 97-242b **【144、94：それぞれ144MF、94MFの事】** 106、68 **【備考】**不輕品：神力品 **【V：典籍の背面文書】** 妙法蓮華經と1行あり。」（中田篤郎〔1989〕p.354）参照。
- (14) [暑70]の記載内容は、写本の写真をもとにした筆者の調査による。
- (15) [S.2439]の紙數の場合は、写本の写真のみでは確認が困難である。（矢吹慶輝〔1931〕）には「**【枚數】**九」とあるが、（『寶藏』19, pp.459a-464a）・東洋文庫の紙焼き（兩者とも144MFに基づくもの）は11枚であるため、11と記載した。
- (16) 一紙の寸法等のデータは、統一性をはかるために、一人（兜木正亨博士）による計測データを採用した。
 ※ [P.4567]については「**【通し番号】**202 **P. No. 4567** **【卷數・品題】**法華經疏 **【本文首尾】**会將佛～具十如 **【行數】**72*¹ **【一紙】**縦26.2cm 横37.0cm **【行數24 界高23.2cm】** **【備考】**仮題、首尾欠、三紙、品一七～品一九の釈文、一行二五～三〇字内外、薄手白紙、初唐。」**【1】**「92の誤り」（兜木正亨〔1978〕p.221）とあり、
 ※ [S.2439]については「**【通し番号】**1895 **S. No. 2439** **G. No. 5610** **【卷數・品題】**法華經疏（仮題） **【本文首尾】**究竟教～此經於 **【行數】**241*¹ **【一紙】**縦26.2cm 横36.2cm **【行數24 界高23.5cm】** **【正藏頁】**85, 194c-199a **【備考】**正藏本の底本、一行二七字内外、卷尾に破損あり、神力品から勸發品まである中、普門品偈の釈はない、白い紙、六世紀。」**【1】**「240の誤り」（兜木正亨〔1978〕p.184）とある。
- (17) 三本には品題のみが記されており、「第～～」といった品數は示されていない。したがって本稿では便宜上『大正藏』収録の現行本『妙法蓮華經』の体裁（品數）にしたがい28品とする。
- (18) 所藏機関より発行された目録の情報に基づく。

※ [P.4567] は「VI^e siècle」（『BnF』 V, p.26）とあり、

※ [S.2439] は「5610. *—*p'in 21-28. Good MS. of early 6th cent. Whitish buff paper, stained in parts, 12 ft. Y*¹, 33 (1). S. 2439.」【*1】「Y. = Yabuki's *Mei-sha Yoin*」（『Giles』 p.171）とある。

- (19) 引用文中、[…]・(=…)・下線・太字は筆者による。以下同様。
- (20) 「(13) 矢吹慶輝『鳴沙余韻解説』一〇一頁。」（平井有慶 [1977c] p.74 注(13) 参照。
- (21) 「(14) 「六世紀の半ばあたりの非標準形式写本」（藤枝晃前掲論文「〔北朝における『勝鬘經』の伝承』東方学報40冊」三四一頁）というか。藤枝晃『墨美』一一九号図二一乃至二二に類似する。」（平井有慶 [1977c] p.74 注(14) 参照。
- (22) 「第二類は北朝期の逸疏といわれてしかるべきもので、経文に段落をもうけるところに特徴がある。」（平井有慶 [1977c] p.72）参照。
- (23) 「この疏はその科段立て、あるいは段落に区切る点に特徴がある。その段落分けは詳細を極めるといってもよく、法雲疏のそれに匹敵する段落を持つもののごとくであるが、法雲疏のごとく来意釈に続いてその段落に区切る説明文がまとめて述べられるということはない。神力品のごとく大段落の区切り説明がある場合もあるが、大凡は段落の最初の頃から経文の解釈に入り、その中で中・小の段落分けがなされる。」（平井有慶 [1978b] p.119）参照。
- (24) （平井有慶 [1978b] p.120）に「次に特質とすべきは、これから釈すべき経文句々の出だし方である。「從……已下」として出だし、その経文がどこまでかを明確にしたい場合は「從……已下訖……」と「訖」の字を附す。このように経文を出だし、その一語句章節がいかなる大意を有するか、前後との関係はどうかなどの解釈がなされ、その中で特に説明したい経句については、「……者」と出だす。……（中略）……「從……已下」の抽出方式は、当本が經典の段落分けとその段落の大意釈にその注釈の重点を置いている以上、極めて必然的な方式といえよう。したがって（ト）（チ）本は品の冒頭が「從此已下」で始まる場合があり、不輕品・神力品・囑累品・葉王品がこれにあたり、陀羅尼品「從此下」、妙莊嚴王品「從已下」もこれの変化とみれば、現存九品の中、六品までが「從此已下」で始まる。……（中略）……これを（ト）（チ）本の開口定型句とし得るかもしれない。」と、（平井有慶 [1981b] p.261）に「Ⅲ類（E）、（F）（T 二七五一）、（G）。（E）（F）二本は同疏が何らかの理由から切断されたもののごとくである。（G）は以下の特徴から同類に加えるものである。①冒頭に（經典全体の分科。これも特徴）大段落切りの記述あり、②次に品の来意釈がある。ただし菩薩名の附された品のみ、「其人……」「此人……」と品名釈（来意釈に類する意味であろう）が冒頭にくる。ⅠⅡ類本とも来意釈が冒頭に

あつて、それは重要な構成要素であるのに比して、これは逆の意味で看過できない。これらのことは、次の点と深く関連させて考察すべきでもある。③再び、例えば「就此品中凡有……」と、品内を（中）段落に区切る記述があり、それが経句に適用され、場合によつてはその説明の中で更に小さい段落に分けられる。この詳細な段落切りにこそ、当疏の最大の特徴があるとみたい。経句の出し方には、「從……已下」が多用される。これは、かくのごとき注釈態度と不可分の方法ともいえよう。ただし（G）本は前二本と筆体が違うから同一写本ではないが、注釈形式の類似から関連を有した疏本と考えて、この類に含めるとする。以上の特徴は、各類のそれぞれが必ず一セットになつてあらわれる。このことが特徴としての重要さである。これによつて類型として区別できると考えられる。」とある。

※引用文中の略語の説明は以下のとおり。（ト）=[S.2439]、（チ）=[暑70]、Ⅰ類：[S.2733]・[S.4102]、Ⅱ類：[淡32]・[S.2463]、Ⅲ類：（E）=[暑70]、（F）=[S.2439]、（G）=[玉26]

- (25) 該当文例の典拠は【表7】を参照されたい。
- (26) 科段分けをする際に用いられる叙述の仕方、寶亮（CE.444-509）等集『大般涅槃經集解』（T.37 No.1763）を筆頭に、主に六世紀の注釈書によく見られるものである。ただし、本疏（[P.4567]・[暑70]・[S.2439]）は、厳密に言えば、「從～（經文）～已下。訖～（經文）～。」という形式であつて、この形式は本疏のほか、敦煌文書の『本業璣珞經疏』（=[S.2748]・T.85 No.2798）や惠龍写記『維摩經義記』（=[S.2732]・T.85 No.2769）からも見られるが、その頻度からして、これは本疏ならではの特徴的な叙述の仕方（注釈の方法）とみることができよう。とくに[S.2732]は[P.4567]と筆跡が類似する（ところがある）ことを指摘しておきたい。
- (27) （平井宥慶 [1991] p.374・[1993] pp.664-665）参照。
- (28) 「4567 *Commentaire du Miao fa lien houa king* 妙法蓮華經. / Déb. et fin manquent. Du K. 5, *p'in* 17, déb. manque (1^{re} citation du sūtra: T. 262, vol. 8*¹, p. 45 b 11.1-13.2, sur la col. 2) à k. 6, *p'in* 19, déb. seulement (dernière citation: p. 47 c 8.2-5, sur la col. 86). / Sous-titres intermédiaires: *Souei hi [kong tō] p'in* 隨喜[功德]品 [n° 18], col. 43, et *Fa che kong tō p'in* 法師功德品 [n° 19], col. 79. / Pour un autre fragment du même ms., cf. S. 2439 (*p'in* 21 à 28), éd. in T. 2751, vol. 85, pp. 194 c-199 a. / Cf. TKHK*², p. 221, n° 202. / …… / VI^e siècle [26,5 x 142,8 cm]] 【1】「9の誤り」【2】「KABUTOGI Shōkō 兜木正亨, *Tonkō Hokekyō mokuroku* 敦煌法華經目錄. Tokyo, 1971. (『BnF』V, p.26) 参照。」(『BnF』V, p.207・{[\(74\)](http://visualiseur.bnf.fr/CadresFenetre?O=NUMM-</p>
</div>
<div data-bbox=)

- 213900&I=237&M=pagination]) 参照。フランス語の和訳は Clementine DECLERCQ 氏に助言を頂いた。記してお礼申し上げたい。
- (29) ちなみに、費長房撰（CE.597）『歷代三寶記』卷第十一に「妙法蓮華經普門品重説偈一卷右四經合五卷。武帝世。北天竺捷達國三藏法師闍那崛多。周言志德。於益州爲總管上柱國譙王宇文儉譯。沙門圓明筆受。」【T.49 p.100 脚註26】「説=誦㊦㊧」【T.49 p.95 脚註24】「經=部㊦㊧*」【T.49 p.100 脚註29】「捷=捷明」（T.49 no.2034 p.100c, //7-11）とあり、これが「普門品重頌偈」に関する現存する経録上における初出である。
- (30) 「三、《法華經疏》，作者不详。原著卷数不详。敦煌遗书存2号。均无名题，现题系据内容所拟。（1）伯4567号，首尾均残。现存文自“分別功德品第十七”（首残）至“法師功德品第十九”（尾残）。（2）斯2439号，首尾均残。现存文自“如來神力品第二十一”（首残）至“普賢菩薩勸發品第二十八”（尾残）。本疏非逐句疏釋經文，重點在闡發每品大意。疏中《普門品》缺少對后補“重頌”的釋文，不避“世”字諱，字体亦为南北朝写本。釋文极少引用其他論師的論述，通篇几乎均由作者本人叙述。本疏未为我国历代大藏经所收，敦煌出土后，《大正藏》据斯2439号录文收入第85卷。现可据伯4567号补充。」（方廣錫 [1998F] p.45）参照。
- (31) 「二、《法華經疏》，作者不详。原著卷数不详。北图存2号：（一）玉26号，首尾均残，存337行，所疏为《譬喻品》第三（首残）、《信解品》第四（尾残）。（二）暑70号，首尾均残，存98行，所疏为《法師功德品》第十九（首残）至《如來神力品》第二十一（尾残）。上两号体例一致，笔迹相同，当为同一人所书之同一种经疏。原卷无标题，今题系据内容所拟。因卷首已佚，本疏科分不清。釋文较精。从行文风格看，似为六朝时作品。本疏未为历代大藏经所收。」（方廣錫 [1998F] p.45）参照。
- (32) 智顗（CE.538-597）説『妙法蓮華經文句』卷第十上に「南師從偈後長行下。屬流通段。引上迹門文殊現在亦是流通。北師以四信弟子現在聞經。判屬正説。從又如來滅後下。乃是流通。二家盡可用。今且依南方。」（T.34 no.1718 p.137a, //21-24）とあり、ここの「又如來滅後」以下を流通と（しそれ以前を正説と）する北師の分科と經文の段落分けの面においては一致をみるが、続けて「今且く南方に依る」とあるように、以下に北師の分科に関する詳説は用いられていないために、これ以上の対比・論究は許されない。
- (33) 『妙法蓮華經文句』卷第一上（T.34 no.1718 p.1c）によれば、廬山慧龍は、文を分けて、序・正・流通（一經三段）となし、「方便品」より「安樂行品」までを因門に、「踊出品」より下は果門に配していたという。なお、法雲は「分別功德品」の半品を因門と、「隨喜功德品」を因果門と、「法師功德品」・「常不輕

菩薩品」の二品を果門とする（『法華義記』卷第八・T.33 no.1715 p.673a）。したがって両者とも本疏とその分科を異にする。

- (34) 後掲の註 (61) 参照。

- (35) [P.3308] の奥書は以下のとおり。

P.3308_110 (06): 利都法師釋之

P.3308_111 (20): 法華經義記第一卷 比丘曇延許 丙辰歲 用紙卅張

P.3308_112 (21): 大統二年歲次丙辰六月庚申朔三日□西寫此法華

P.3308_113 (18): 儀記一部願令此福逮及含生有識之類齊悟

P.3308_114 (06): 一實無二之理

- (36) 【表7】の「行数」の枠内の記号「//」は写本の切断を示す。

- (37) (『解説』p.101) に「本疏家の觀世音釋義にして、觀音を西方菩薩、此土有縁となすは、法雲、吉藏の義疏に此の意義明かならず、寧ろ天台の『法華文句』第十下の東西兩方の釋意と其の揆を一にせり。」という指摘がある。

- (38) 『大正藏』には「興」とあるが、写本に「興」とあるため、「興」に訂正した。

- (39) 『大正藏』・写本には「身法」とあるが、「法身」の誤写であるため、「法身」に訂正した。

- (40) 『大正藏』には「奪」とあるが、写本には「聽？」とある。

- (41) 『妙法蓮華經文句』卷第一上に「有師作四段。初品爲序段。從方便至安樂行。開三顯一段。從踊出訖分別功德。開近顯遠段。後去餘勢流通段。」(T.34 no.1718 p.1c, ll.27-29) とあり（光宅より先行する）有る師の一經四段の分科を紹介しているが、本疏は「分別功德品」の「復如來滅後」已下を果門中の大段第四の後世流通と、「神力品」以下を流通文とするため、有る師の分科とは異なる。また、湛然 (CE.711-782) 述『法華文句記』卷第一上には「有師四段。但合二三爲正。甚符經文。但闕立本迹二門。各有三段意耳。其名既闕義恐不周。」(T.34 no.1719 p.154a, ll.6-9) とある。

※上二書における有る師とは、『法華義疏』卷第一に「印法師開此經凡爲四段。序品爲序。從方便品竟安樂行品十二品開三顯一明乘方便乘真實。從涌出品至分別功德品彌勒說偈以前兩品半開近顯遠明身方便身真實。從分別功德品竟經是流通分也。彼雖云安樂行品前是因分。然見寶塔品下有三品又是果宗之由漸。必須兩向望之。」(T.34 no.1721 p.452c, ll.22-29) とあるように、僧印のことである。

- (42) 首欠。[P.4567] の首部は、現行本『妙法蓮華經』「分別功德品」第十七の第二偈頌の末尾の注釈からが残存し、始まり（＝分科:3-?-3-1・(C) (?) ⊖ (a)）は不明であるが、第三長行の途中〔＝「當知是爲深信解[●]相。」【T.9 p.45 脚註[●]】「相＝想[●]」 T.9 no.262 p.45b, ll.22）以前〕までを〔經の大段[◎] 第三（正説文か）の^(?) 果門中の大段[◎] 第三か〕〕三品〔＝品の大科か、(a)の始まりは不明・(b)・

- (c) に分科して解釈している。
- (43) (b)「分別功德品」第十七に「^(b)又阿逸多。若有聞佛壽命長遠解其言趣。是人所得功德無有限量。能起如來無上之慧。」(T.9 no.262 p.45b, 11.11-13) とある。
- (44) 法順写記『法華義記』第三(=[S.4102]・CE.406-508)「安樂行品」に「若爾即忍辱爲地。由有忍故。惡土流通。堪受加毀。萬行扶疎增長。功由於忍。故指忍辱爲地。」(T.85 no.2748 p.177a, 11.9-11・S.4102 pp.11-12, 11.251-253) と類似する文例が見られる。
- (45) (c)「分別功德品」第十七に「^(c)何況廣聞是經。若教人聞。若自持若教人[●]持。若自書若教人書。若以華香瓔珞幢幡繪蓋香油[●]酥燈供養經卷。是人功德無量無邊。能生一切種智。[●]阿逸多。若善男子善女人。聞我說壽命長遠深信解。則爲見佛常在耆闍崛山。共大菩薩諸聲聞衆圍繞說法。又見此娑婆世界。其地琉璃坦然平正。閻浮檀金以界八道寶樹行列。諸臺樓觀皆悉寶成。其菩薩衆咸處其中。若有能如是觀者。當知是爲深信解[●]相。」【T.9 p.45 脚註⑦】「持=人(敦丙)」【T.9 p.45 脚註⑧】「酥=蘇(宋明音傳敦敦丙)」【T.9 p.45 脚註⑨】「相=想(傳*)」(T.9 no.262 p.45b, 11.13-22) とある。
- (46) 「根」の衍字か。
- (47) 四A(a)(b)「分別功德品」第十七に「又[●]復如來滅後若聞是經。而不毀[●]皆起隨喜心。當知已爲深信解[●]相。^(b)何況讀誦受持之者。斯人則爲頂戴如來。阿逸多。是善男子善女人。不須爲我復起塔寺及作僧[●]坊以四事供養衆僧。所以者何。是善男子善女人。受持讀誦是經典者。爲[●]已起塔[●]造立僧坊供養衆僧。則爲[●]以佛舍利起七寶塔。高廣漸小至于梵天。懸諸幡蓋及衆寶鈴。華香[●]瓔珞[●]末香塗香燒香。衆鼓伎樂簫笛箏篳篥種種舞戲。以妙音聲歌唄讚頌。則[●]爲於無量千萬億劫作是供養已」【T.9 p.42 脚註⑧】「以=已(傳*)」【T.9 p.44 脚註⑥】「末=秣(傳*)」【T.9 p.45 脚註⑨】「相=想(傳*)」【T.9 p.45 脚註⑩】「皆=皆(傳*)」【T.9 p.45 脚註⑪】「坊=房(傳*)」【T.9 p.45 脚註⑫】「造=告(傳*)」【T.9 p.45 脚註⑬】「瓔珞=瓔珀(傳*)」【T.9 p.45 脚註⑭】「爲+(已)敦敦(敦丙)」(T.9 no.262 p.45b, 12.22 - p.45c, 14) とある。
- (48) 「分別功德品」第十七の「復如來滅後」(T.9 no.262 p.45b, 11.22-23) を指す。
- (49) 【三報】現報、生報、後報のこと。
- (50) 『法華經疏』(=[S.2439]・本疏の)「神力品」に「從是故已下。品之第四結勸二人。是以此經理深益物[●]處大。」(T.85 no.2751 p.194c, 11.22-23・S.2439 p.1, 11.10-11) と類似する文例が見られる。
- (51) 以下、下品・上品・下依・上依の四つの術語を以て注釈される。
- ※なお、『法華義記』(=[S.2733]・[S.4107])に頻出する四依との関係や、吉藏撰『法華義疏』巻第十に「又復如來滅後下第二明佛滅後持經人功德。初長行後

偈頌。長行明四品人。一下品謂聞慧人。二中品思慧人。三上品修慧人。四上上品修慧之中更開此一品也。」(T.34 no.1721 p.612b, 11.11-14) とある、下品、中品、上品、上上品との関係については今後の検討すべき課題である。

- (52) 【二人功德】上品等弟子、上依法師の二人功德。
- (53) 24行と25行の間に継ぎ目がある。
- (54) 『法華經疏』(=[S.2439]・本疏の)「神力品」に「亦復冥順即法供養。」(T.85 no.2751 p.195a, 11.13-14・S.2439 p.1, 11.23-24) と類似する文例が見られる。
- (55) (c)(d)(e)「分別功德品」第十七に「^(c)阿逸多。若我滅後聞是經典。有能受^(d)持若自書若教人書。則爲起立僧坊。以赤栴檀作諸殿堂三十有二。高八多羅樹高廣嚴好。百千比丘於其中止。園林^(e)浴池經行禪窟。衣服飲食床褥湯藥。一切樂具充滿其中。如是僧坊堂閣若干。百千萬億其數無量。以此現前供養於我及比丘僧。是故我說如來滅後。若有受持讀誦爲他人說。若自書若教人書供養經卷。不須復起塔寺及造僧坊供養衆僧。^(d)況復有人能持是經。兼行布施持戒忍辱精進一智慧。其德最勝無量無邊。譬如虛空東西南北四維上下無量無邊。是人功德亦復如是無量無邊。疾至一切種智。^(e)若人讀誦受持是經爲他人說。若自書若教人書。」【T.9 p.45 脚註⑮】「[持]－^(e)栴」【T.9 p.45 脚註⑯】「浴＝流^(e)敦(敦丙)*」(T.9 no.262 p.45c, 11.5-19) とある。
- (56) 『法華經疏』(=[S.2439]・本疏の)「藥王品」に「從是故宿王華已下。正勸法師當於未來通經益物。」(T.85 no.2751 p.196a, 11.10-11・S.2439 p.4, 178) と類似する文例が見られる。
- (57) (f)「分別功德品」第十七に「阿逸多。^(f)是善男子^(g)善女人。若坐^(g)若立若行處^(g)此中便應起塔。一切天人皆^(g)應供養如佛之塔。」【T.9 p.45 脚註⑰】「[善女人]－(敦丙)」【T.9 p.45 脚註⑱】「[若立]－敦」【T.9 p.45 脚註⑲】「此＝是敦(敦丙)」【T.9 p.45 脚註⑳】「[應]－(敦丙)」(T.9 no.262 p.45c, 12.9 - p.46a, 12) とあり本箇所からの取意である。
- (58) 「分別功德品」第十七に「爾時世尊欲重宣此義。而說偈言 ^(b)若我滅度後 能奉持此經 斯人福無量 如上之所說 是則爲具足 一切諸供養 以舍利起塔 七寶而莊嚴 ^(b)表刹甚高廣 漸小至梵天 寶鈴千萬億 風動出妙音 又於無量劫 而供養此塔 ^(b)華香諸瓔珞 天衣衆伎樂 燃香^(b)油酥燈 周匝常照明 惡世^(b)法末時 能持是經者 則爲已如上 具足諸供養 ^(d)若能持此經 則如佛現在 以牛頭^(b)栴檀 起僧坊供養 堂有三十二 高八多羅樹 上饌妙衣服 床臥皆具足 百千衆住處 園林諸^(b)浴池 經行及禪窟 種種皆嚴好 若有信解心 受持讀誦書 若復教人書 及供養經卷 散^(b)華香^(b)末香 以須曼^(b)瞻蔔 ^(b)阿提目多伽 薰油常^(b)燃之 如是供養者 得無量功德 如虛空無邊 其福亦如是

⁽⁶⁾況復持此經 兼布施持戒 忍辱樂禪定 不[○]瞋不惡口 恭敬於塔廟
謙下諸比丘 遠離自高心 常思惟智慧 有問難不[○]瞋 隨順爲解說
若能行是行 功德不可量 ⁽⁴⁾若見此法師 成就如是德 應以天華散
天衣覆其身 頭面[○]接足禮 生心如佛想 又應作是念 不久詣道[○]樹
得無漏無爲 廣利諸人天 其所住止處 經行若坐臥 乃至說一偈
是中應起塔 莊嚴令[○]妙好 種種以供養 佛子住此地 則是佛受用
常在於其中 經行及坐臥【T.9 p.44 脚註6】「末=秣[○]」【T.9 p.45 脚註16】
「浴=流[○]（敦丙）*」【T.9 p.45 脚註18】「瞋=惠[○]」【T.9 p.46 脚註4】「[表利
…妙音]二十字-[○]（敦丙）」【T.9 p.46 脚註5】「華香=香華[○]」【T.9 p.46 脚註
6】「油酥=油蘇[○]（宋明宮敦）=蘇油[○]」【T.9 p.46 脚註7】「法末=末法（敦
丙）」【T.9 p.46 脚註8】「梅=施[○]（宋宮敦）（敦丙）」【T.9 p.46 脚註9】「華香=香華
（敦方）」【T.9 p.46 脚註10】「campaka, 瞻=薺[○]（明）」【T.9 p.46 脚註11】「Atimukta.」
【T.9 p.46 脚註12】「燃=然（敦丙）」【T.9 p.46 脚註13】「接足禮=接禮足[○]（敦
丙）」【T.9 p.46 脚註14】「樹=場[○]」【T.9 p.46 脚註15】「妙=好（敦丙）」（T.9
no.262 p.46a, l.2 - p.46b, l.13）とある。

- (59) 法雲撰『法華義記』卷第八「隨喜功德品」第十七には「但佛答長行中格量**五品**人功德即成五段。從初下有三十二行半。從[○]初人明五十人展轉相教最後五十人聞法華功德無量。何況最初人功德。[○]第二品人故來詣僧坊功德無量。[○]第三人明於講處勸人坐聽得果報之相。[○]第四品人又在於會外勸他人往聽。[○]第五品人能專心聽法。復能爲他人說法。」（T.33 no.1715 p.673c, ll.16-23）と、吉藏撰『法華義疏』卷第十一には「問。品具明**五人功德**。何故偏題隨喜品。 答。[○]隨喜是五人之初。故偏說也。又今品以別標名。下法師品從通受稱二名相避故互舉也。第一人[○]取其往詣聽法。故得乘天宮等報。若就聽法邊明得報者福則無邊。此中三品人。若下品動足得乘象馬報。中品得乘七珍輿。上品乘天宮也。第二人[○]但取分坐義邊故得三王之報。若就聽法邊福則無窮。第三人[○]正取勸人聽法華義得四種報。一者勸人聽經則是其人善友。故後還得值善友報。所以言與陀羅尼菩薩共生一處也。二者勸人聽法前人受教須臾聞法發生智慧後還得智慧果報。是故經云利根智慧。三者以口業勸人聽微妙法生他正信正解。故得離口醜陋得端正果報。四者勸人聽經是人善友世世常得見佛聞法信受教誨。何況一心下[○]第四人。其福最勝報不可說也。」（T.34 no.1721 p.614a, l.24 - p.614b, l.11）とあるように、ここは傳統的に**五品**に配釈されるところであるが、本疏は**四品**に配釈しており、極めて特徴的である。引用文中、記号「[○]」は筆者による。以下同様。

- (60) 『法華經疏』（= [S.2463]）「隨喜功德品」には「[○]華報。若復有人。於講法處坐。至轉輪王所坐之處。[○]第三分坐人。亦是華報也。阿逸多。若復有人語餘人言。至信受教[○]教誨。[○]第四勸人聽經。此人相勸之時。和顏悅色。鼓[○]舌捫今德。

諸根具足。悉皆嚴好也。何況一心以下。⁹第五況出初依也。初九偈頌第一人。若有勸一人五偈。先頌第四人。故詣僧房二偈。頌第二人。若於講法處一偈。頌第三人。況復一心聽一偈。頌第五人也。」【T.85 p.189 脚註6】「首缺」【T.85 p.189 脚註6】「[教] - ?」(T.85 no.2750 p.189b, l.26 - p.189c, l.5・S.2463 p.37, ll.1-5) とある。

※ちなみに、『大正蔵』は当該文献の始まりを「華報」から（『宝蔵』19, pp.656-662・37コマから49コマまで・②）とするが、写本にはこの前半部にあたる53行（『宝蔵』19, pp.652-653・28コマから31コマまで・①）が含まれている。なお、『大正蔵』未収録の当該文献の前半部①の末尾からは「第一・第二」といった語句は見当たらず、①と②の間にはなお数行の欠損が認められる。①について詳しくは（『解説』pp.99-100）・（兜木正亨 [1978] p.184）・（平井有慶 [1993] pp.651-652・[B]（一））参照。

- (61) 48行と49行の間に継ぎ目があり、この辺りから筆跡の変化が見られる。従り下は同一人物の筆跡と考えられるため、本疏は少なくとも二人以上の複数人（グループ）によって写記されたことが分かる。
- (62) (a) 「隨喜功德品」第十八に「^(a)爾時彌勒菩薩摩訶薩白佛言。世尊。若有善男子善女人。聞是法華經隨喜者。得幾所福。而說偈言 世尊滅度後 其有聞是經 若能隨喜者 爲得幾所福」(T.9 no.262 p.46b, ll.22-26) とあり本箇所からの取意である。
- (63) (b) 「隨喜功德品」第十八に「爾時^(b)佛告彌勒菩薩摩訶薩。阿逸多。如來滅後。若比丘比丘尼優婆塞優婆夷。及餘智者若長若幼。聞是經隨喜已。從法會出至於餘處。若在僧坊若空閑地。若城邑巷陌聚落田里。如其所聞。爲父母宗親善友知識隨力演說。是諸人等聞已隨喜復行轉教。餘人聞已亦隨喜轉教。如是展轉至第五十。阿逸多。其第五十善男子善女人隨喜功德。我今說之。」(T.9 no.262 p.46b, l.27 - p.46c, l.6) とある。
- (64) 『法華經疏』（＝[S.2439]・本疏の）「普賢品」に「所以舉者。正欲況出上依法師。明弟子持經功德尚多。」(T.85 no.2751 p.198c, ll.15-16・S.2439 p.11, l.224) と類似する文例が見られる。
- (65) 『法華經疏』（＝[S.2463]）「法師功德品」に「初依人得理尠少。言偈句也。」(T.85 no.2750 p.189c, l.23・S.2463 p.38, l.14) と、「陀羅尼品」に「具足受持者。功德甚多。更有一解。下依法師。得理尠少。由尚不可限量。」(T.85 no.2750 p.193c, ll.20-21・S.2463 p.47, ll.206-207) と類似する文例が見られる。
- (66) 【私訳】「前（五十人展転のことか、とてここでは一者か）者は、皆な具さに自行外化す。是の勝るを以て、従つて此れ不如なり（すなわち大施主の功德に勝ると）。聖心微なりと雖も、施福の格量するに不相ならん（たとえ転教し

た五十人目の聖なるところが微弱であったとしても、自行外化の功德の計り知れない。此れを況や。何を以て然らんや。此れ信を明かさんと欲するに、乃ち法身眞極の理の中に於いて、此の微解を生ず。因の爲めに後に必ず成佛。生起こつて離るるは必ず但だ然るに、是れ勝なり。」

- (67) 【格量】（菅野博史 [1996] p.533a）に「(30) 格量 計量するの意。格は量と同義。古い用例は未見。」とある。
- (68) (b)①「隨喜功德品」第十八に「佛告彌勒。我今分明語汝。是人以一切樂具。施於四百萬億阿僧祇世界六趣衆生。又令得阿羅漢果。所得功德。不如[●]是第五十人。聞法華經一偈隨喜功德。百分千分百千萬億分不及其一。乃至算數譬喻所不能知。阿逸多。如是第五十人展轉聞法華經隨喜功德。尚無量無邊阿僧祇。^⑥何況最初於會中聞而隨喜者。其福復勝無量無邊阿僧祇。不可得比。」【T.9 p.46 脚註25】「[是]－[●]」（T.9 no.262 p.46c, l.23 - p.47a, l.2）とある。
- (69) ①②「隨喜功德品」第十八に「又^⑥阿逸多。若人爲是經故。往詣僧坊若坐若立。須臾聽受。緣是功德轉身所生。得好上妙象馬車乘珍寶輦[●]及乘天[●]宮。^⑥若復有人。於講法處坐。更有人來。勸令坐聽。若分座令坐。是人功德轉身。得帝釋坐處。若梵王坐處。若轉輪聖王所坐之處。」【T.9 p.47 脚註1】「宮+（殿）[●]」（T.9 no.262 p.47a, l.2-8）とあり本箇所からの取意である。
- (70) ④「隨喜功德品」第十八に「阿逸多。^⑥若復有人語餘人言。有經名法華可共往聽。……世所生。見佛聞法信受教[●]誨。」【T.9 p.47 脚註8】「誨=悔[●]」（T.9 no.262 p.47a, l.8-20）とある。
- (71) ⑤「隨喜功德品」第十八に「^⑥阿逸多。汝且觀是勸於一人令往聽法功德如此。何況一心聽說讀誦。而於大衆爲人分別如說修行。」（T.9 no.262 p.47a, l.20-23）とある。
- (72) 『法華經疏』（=[S.2439]・本疏の）「陀羅尼品」に「此即出下依功德所以俱言一四句偈者。具欲彰下依得理處少不如上依功德猶常甚多。」（T.85 no.2751 p.197b, l.16-18・S.2439 pp.7-8, l.153-154）と類似する文例が見られる。
- (73) 「隨喜功德品」第十八に「爾時世尊欲重宣此義。而說偈言^{⑥⑦} 若人於法會 得聞是經典 乃至於一偈 隨喜爲他說 如是展轉教 至于第五十 最 後人獲福 今當分別之 如有大施主 供給無量衆 具滿八十歲 隨 意之所欲 見彼衰老相 髮白而面皺 齒疎枯枯竭 念其死不久 我 今應當教 令得於道[●]果 卽爲方便說 涅槃眞實法 世皆不牢固 如 水沫泡焰 汝等咸應當 疾生厭離心 諸人聞是法 皆得阿羅漢 具 足六神通 三明八解脫 最後第五十 聞一偈隨喜 是人福勝彼 不 可爲譬喻 如是展轉聞 其福尚無量 何況於法會 初聞隨喜者^⑥ 若 有勸一人 將引聽法華 言此經深妙 千萬劫難遇 卽受教往聽 乃

六朝古逸『法華經疏』の同本離片に関する一考察（金）

至須臾聞	斯人之福報	今當分別說	世世無口患	齒不踈黃黑	臂
不厚褰缺	無有可惡相	舌不乾黑短	鼻高修且直	額廣而平正	面
目悉端嚴	爲人所喜見	口氣無臭穢	優鉢華之香	常從其口出	◎若
故詣僧坊	欲聽法華經	須臾聞歡喜	今當說其福	後生天人中	得
妙象馬車	珍寶之輦輿	及乘天宮殿	◎若於講法處	勸人坐聽經	是
福因緣得	釋梵轉輪座	◎何況一心聽	解說其義趣	如說而修行	其

福不可[●]量」【T.9 p.47 脚註⁹】「果=教[●]」【T.9 p.47 脚註¹⁰】「量=限[○]宣[●]」
 (T.9 no.262 p.47a, l.23 - p.47c, l.1) とある。

- (74) 平井宥慶教授は [P.4567] に見られる思想に触れて「これは「法師功德品」の首部、当品の総説を叙する一段で、前品では上依の功德、ここでは下依の功德を明かすと説き、その下依功德は「通化益物、することによって、[●]即身。に六根の現報を得るというのである。[●]即身。というのはいかにも唐突であるが、これは日本密教では無上に肝要な教理用語であることは言をまたない。ここにその萌芽があるというつもりではないが、それならばここで使用された発想原理はなんであろうか。その実行は「実道善理興資、を、劫を積んで行くこと、そうすれば[●]即身。に[●]現報、を獲得できると解説しているところに着目すると、これは般若学の実践道、波羅蜜を修するねらいを含んでいるとは解せられないであろうか。そのことによって即身に体现できると考えていたとみなされる。[●]即、の一字に重みを感じられる。……五〜六 c 初期に想定できる思想群は、涅槃学派、成実学派そして羅什以来の般若学が考えられる。そのどれかに特定することは無理であるが、可能性の度合からいえば、般若学系の「空理、思想と、或は涅槃学派の「悉有成仏、思想とに関連性を強く感ぜられるところで、これ以上の確定はもはや留保しなければならない。」(平井宥慶 [1993] p.663) と推定している。

- (75) 『法華經疏』(=[S.2439]・本疏の)「神力品」に「若能末世通經化物不但見佛。」(T.85 no.2751 p.195a, l.13・S.2439 p.1 l.23) と類似する文例が見られる。

- (76) (平井宥慶 [1993] p.662) には「弘」とある。
 (77) (平井宥慶 [1993] p.662) には「莊？」とある。
 (78) (BD06196 p.2, l.31) 参照。
 (79) (BD06196 p.1, ll.7-8) 参照。
 (80) (平井宥慶 [1993] p.662) には「持？」とある。
 (81) (平井宥慶 [1993] p.662) には「初」とある。
 (82) (平井宥慶 [1993] p.662) には「興」とある。
 (83) (平井宥慶 [1993] p.662) には「来」とある。
 (84) (平井宥慶 [1993] p.662) には「□」とある。

- (85) (平井宥慶 [1993] p.662) には「□」とある。
- (86) (平井宥慶 [1993] p.662) には「言」とある。
- (87) (a)(b)「法師功德品」第十九に「^(a)爾時佛告常精進菩薩摩訶薩。若善男子善女人。受持是法華經。若讀若誦若解說若書寫。是人當得八百眼功德。千二百耳功德。八百鼻功德。千二百舌功德。八百身功德。千二百意功德。以是功德莊嚴六根皆令清淨。^(b)是善男子善女人。父母所生清淨肉眼。見於三千大千世界。内外所有山林河海。下至阿鼻地獄上至有頂。亦見其中一切衆生。及業因緣果報生處。悉見悉知。」(T.9 no.262 p.47c, 11.3-11) とある。
- (88) 灌頂 (CE.561-632) 撰『大般涅槃經疏』卷第十「四依品」に「開善治城云。九恒皆初依位。熙連至二恒是初心習種性。三恒至五恒是中心性種性。六恒至八恒是後心道種性。亦極難解。若全稱佛法以爲一斤。則初依人。窮佛法盡至三四依復何所爲若稱初依以爲一斤。此乃自是初依之法。何關佛法。今明熙連至三恒爲初依一分。八分爲二依。二十四爲三依。十六爲四依。文云。具足解盡其味(云云)。」(T.38 no.1767 p.97a, 11.11-19) とある。
 ※開善は、梁の三代法師の一人、開善寺智藏 (CE.458-522) のこと。治城は、治城寺素法師 (彼の法華誦持のことは、慧詳撰『弘贊法華傳』卷第六「梁遊方沙門正則」[T.51 no.2067 p.30b, 1.2 - p.30c, 1.1] に詳しい) のこと。したがって、本疏の著者と素法師との間にはある関連性を認めることができる。
- (89) 竺法護訳 (CE.286) 『正法華經』「歎法師品」第十八に「爾時世尊。告常應時菩薩大士。若族姓子族姓女。受是經典持讀書寫。當得十眼功德之本八百名稱。千二百耳根。千二百鼻根。千二百舌[○]根。千二百身行。千二百意淨。是爲無數百千品德。則能嚴淨六根功祚。】【T.9 p.119 脚註⑧】「根=福[○]」(T.9 no.263 p.119a, 11.18-22) とあり本箇所からの引証である。
- (90) 法藏 (CE.643-713) 述『華嚴經探玄記』卷第八には「又依肇法師法華疏中十善爲本。一善以九善莊嚴名爲百福。不知出何聖教。」(T.35 no.1733 p.260a, 11.13-15) とあり僧肇の『法華疏』における十善の説を出している。
- (91) 類似する文例として、無羅叉訳 (CE.291) 『放光般若經』卷第十八に「自行六波羅蜜。勸人習六波羅蜜。見有行者代其歡喜。○自行十善[○]勸人令行。○見行十善者[○]讚歎代其歡喜。」(T.8 no.221 p.130b, 11.8-10) と、竺佛念訳 (CE.376-378) 『菩薩瓔珞本業經』卷上には「佛子。二金剛海藏法寶。所謂○自行十善。○人行十善。○讚歎行十善者。○讚歎十善法。現千佛土教化一切衆生。無相達觀皆成就故。」(T.24 no.1485 p.1014c, 1.28 - p.1015a, 1.1) と、鳩摩羅什訳 (CE.404) 『摩訶般若波羅蜜經』卷第二十四には「○自行十善亦[○]教[○]他[○]人行十善。○讚歎行十善法。○歡喜讚歎行十善者。】【T.8 p.400 脚註⑫】「[他]-[○]」【T.8 p.400 脚註⑬】「[人]-[○]」(T.8 no.223 p.400c, 11.1-2) とある。

- (92) 『妙法蓮華經疏』卷下に「千二百功德。據十善爲義。○自行○教化。○讚嘆○隨喜。各有十善。合四十也。一善又能兼行十善。四十善一一皆爾。合四百善。四百善各有上中下品。則千二百也。三根不如。得中下二品八百善也。餘根勝故。故千二百也。」(SZ.27 no.577 p.16a, ll.3-7) と類似する文例が見られ、『法華義記』卷第八「法師功德品」第十八には「十善有二。一者止善二者行善。今且就止善作論。此十善修習之法皆互相顯助。何者故。如持不殺戒爲首次修餘九善助成。乃至持正見作頭餘九助成。如是更互相助仍成百善。然此百善便立菩薩之意有四百。何者。○自作百善一百也。○教人行百善二百也。○隨喜人行百善三百也。又○讚歎人行百善四百善也。然此四百就五種法師上作。但就受持法師亦有四百善。何者。自受持。教人受持隨喜人受持讚歎人受持各一百。此卽是四百善。讀經之時亦有四百善也。誦經之時亦有四百善也。解說亦四百書寫亦四百。是則四五二十卽是二千功德也。然菩薩位心欲令萬行皆進。有下品二千。次修中品二千也。次修上品二千也。便成六千功德。此六千功德共得感一根如似五戒共得人身。但欲示自行化他功用顯味配於六根。三根自行化他功用不如。三根自行化他功用勝。是故三根各得八百。三根各千二百也。」(T.33 no.1715 p.674c, ll.10-29) とある。
- (93) 吉藏撰『法華玄論』卷第十に「注經云。始乎十善一善具十善卽成百善。復約○自行○化他○歎人○美法卽成四百。各有三品成千二百。眼等三根助道用弱。但得中下二品故唯八百。意等三根於通化用強。具於三品。故得千二百也。 評曰。注意不必具五法師。」(T.34 no.1720 p.446a, ll.17-22) と劉虬 (CE.438-495) の『注法華經』の説を出しているが、本疏の説とは一致しない。
- (94) 以下欠。写本の写真で見える限り、切断部分は「暑70」とは重ならない。
- (95) 首欠。[P.4567]に見られる現行本『妙法蓮華經』「法師功德品」第十九 (T.9 no.262 p.47c, l.2 - p.50b, l.22) の最後の經文は「是善男子」(T.9 no.262 p.47c, l.8・P.4567 l.86) であり、[暑70]に見られる「法師功德品」第十九の最初の經文は、「遙聞是衆」(T.9 no.262 p.48a, l.24・BD06196 p.1, l.8) である。しかし[暑70]に見られるこの偈文は分科を示すための引文ではなく、ほかの品(=[P.4567]の「分別品」・「隨喜品」、[暑70]の「不輕品」、([暑70]・)「S.2439」の「神力品」)においては末尾において示される長行と偈頌との対応関係が、[暑70]の「法師功德品」の末尾の残存部分からは見当たらない(もっとも「法師功德品」だけが例外的で、注釈形式を異にしていたと考えることも可能であろう)ため、本疏の「分別功德品」の分科は対比し得ない。
- ※おそらく、「法師功德品」の偈文釈を含む24行(=[表1]三本の形状分析)に基づいて考えれば、一紙24行内外であるため)ほどが欠損しているものと考えられる。
- (96) 『妙法蓮華經文句』卷第八下「釋持品」に「佛問如是惡人汝云何觀。答人有五。

一身善口意[●]不善。但念其善不念不善。」【T.34 p.117 脚註⑩】「不善 = 惡^⑩」（T.34 no.1718 p.117c, Ⅱ.15-17）と類似する文例が見られる。

- (97) 『法華經疏』（= [S.2463]）「法師功德品」に「此品所以而來。上雖明弟子。未明師之現報。今明二依菩薩。未來流通大法。化功歸已。經力勳修。即得現報。六根清淨。所以來也。此品大津有二段。初總明六根。三根得八百。三根得千二百。耳根生識。能聞十方諸佛。所說經法。意地思惟分別。生其惠解。舌能說法度人。三根入道中勝。偏得千二百。三根發道緣弱。但得八百也。今解。依舊經。六根齊等。鼻舌身三根塵到。故知。三根遙囑者也。此當是凡夫六根也。今道六根清淨者。此是性^①地菩薩。受持此經。經力勳修。盡皆遙囑。故道遙囑香也。受持得一百。乃至書寫。生五百善。教人復生五百。是一千善。自性隨喜。教人隨喜。復二百。是爲千一百也。是善男子以下 別明六根也。舌根道變者。食體資身。要待破質。得未成身最勝。故道變也。意根道解偈句。非謂文也。初依人得理妙少。言偈句也。心之所行者。識陰也。心所動作者。起相受也。心所戲論者。行陰也。雖未得無漏智者。未得初住無漏也。」（T.85 no.2750 p.189c, Ⅱ.7-26・S.2463 pp.37-38, Ⅱ.5-16）と類似する文例が見られる。

※この類似文例は二本（= 本疏・[S.2463]）の成立の時代や地域の近さを示唆する事例とみることができよう。なお、平井宥慶教授は引用文例の下線部について「ここは現報を説示するところ、その現報は、經典の機能を信じて修行を積みば、即身、だという論法と一脈通ずるものがある。どちら [= [P.4567]・[S.2463]] も、即、に意味のある叙述とみられるのである。」（平井宥慶 [1993] p.663）と指摘している。

- (98) 「法師功德品」第十九に「如是說法者 安住於此間 遙聞是衆聲 而不壞耳根」（T.9 no.262 p.48a, Ⅱ.23-24）とある。
- (99) 「法師功德品」第十九に「地中衆伏藏 金銀諸珍寶 銅器之所盛 聞香悉能知」（T.9 no.262 p.49a, Ⅱ.14-15）とあり本箇所からの取意である。
- (100) 【二人】法師及び弟子、すなわち、上依・下依の法師、上品・下品の弟子のこと。
- (101) (a) 「常不輕菩薩品」第二十に「^{①②③}爾時佛告得大勢菩薩摩訶薩。汝今當知。若比丘比丘尼優婆塞優婆夷。持法花經者。若有惡口罵詈誹謗。獲大罪報。如前所說。其所得功德。如[●]向所說。眼耳鼻舌身意清淨。得大勢。^②乃往古昔過無量無邊不可思議阿僧祇劫。有佛名[●]威音王如來應供正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊。……其佛饒益衆生已。然後滅度。正法像法滅盡之後。於此國土復有佛出。亦號威音王如來應供正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊。如是次第有二萬億佛皆同一號。最初威音王如來。既已滅度。正法滅後於像法中。增上慢比丘有大勢力。^⑤爾時有一菩薩比丘。名常不輕。得

大勢。以何因緣。名常不輕。是比丘凡有所[●]見。若比丘比丘尼優婆塞優婆夷。皆悉禮拜讚歎。而作是言。我深敬汝等不敢輕慢。所以者何。汝等皆行菩薩道當得作佛。……我不敢輕[●]於汝等。汝等皆當作佛。以其常作是語故。增上慢比丘比丘尼優婆塞優婆夷。號之爲常不輕。」【T.9 p.50 脚註⑥】「向=尙[●]」【T.9 p.50 脚註⑦】「威音王 Bhiṣmagarjitasvararāja.」【T.9 p.50 脚註⑩】「見=作[●]」【T.9 p.51 脚註①】「於汝等=汝[●]」（T.9 no.262 p.50b, l.24 - p.51a, l.3）とある。

- (102) (b)(c)「常不輕菩薩品」第二十に「^{(b)(c)}是比丘臨欲終時。於虛空中。具聞威音王佛先所說法華經。二十千萬億偈悉能受持。即得如上眼根清淨耳鼻舌身意根清淨。得是六根清淨已。更增壽命二百萬億那由他歲。廣爲人說是法華經。[●]於時增上慢四衆。比丘比丘尼優婆塞優婆夷。輕賤是人。爲作不輕名者。見其得大神通力樂說辯力大善寂力。聞其所說皆信伏隨從。[●]是菩薩復化千萬億衆令住阿耨多羅三藐三菩提。命終之後得值二千億佛。皆號日月燈明。於其法中說是法華經。以是因緣復值二千億佛。同號雲自在燈王。於此諸佛法中受持讀誦。爲諸四衆說此經典故。得是常眼清淨耳鼻舌身意諸根清淨。於四衆中說法心無所畏。[●]得大勢。是常不輕菩薩摩訶薩供養如是若干諸佛。恭敬尊重讚歎種種善根。於後復值千萬億佛。亦於諸佛法中說是經典。功德成就當得作佛。得大勢。於意云何。爾時常不輕菩薩豈異人乎。則我身是。若我於宿世。不受持讀誦此經。爲他人說者不能疾得阿耨多羅三藐三菩提。我於先佛所。受持讀誦此經爲人說故。疾得阿耨多羅三藐三菩提。得大勢。[●]彼時四衆比丘比丘尼優婆塞優婆夷。以[●]瞋恚意輕賤我故。二百億劫常不值佛不聞法不見僧。千劫於阿鼻地獄受大苦惱。[●]畢是罪已。復遇常不輕菩薩教化阿耨多羅三藐三菩提。得大勢。於汝意云何。爾時四衆常[●]輕是菩薩者。豈異人乎。今此會中跋陀婆羅等五百菩薩。師子月等五百比丘尼。思佛等五百優婆塞。皆於阿耨多羅三藐三菩提不退轉者是。得大勢。^(c)當知是法華經。大饒益諸菩薩摩訶薩。能令至於阿耨多羅三藐三菩提。^{(c)(b)}是故諸[●]菩薩摩訶薩於如來滅後常應受持讀誦[●]解說書寫是經。」【T.9 p.50 脚註①】「瞋=德[●]」【T.9 p.51 脚註②】「輕是=不輕[●]」（T.9 no.262 p.51a, l.3 - p.51b, l.9）とある。

- (103) 24行と25行の間に継ぎ目がある。

- (104) 49行と50行の間に継ぎ目がある。

- (105) 「常不輕菩薩品」第二十に「爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言^{(a)(2)}過去有佛號威音王 神智無量 將導一切 天人龍神 所共供養[●]是佛滅後法欲盡時 有一菩薩 名常不輕 時諸四衆 計著於法 不輕菩薩往到其所 而語之言 我不輕汝 汝等行道 皆當作佛 諸人聞已輕毀罵言 不輕菩薩 能忍受之^{(b)(c)}其罪畢已 臨命終時 得聞此經六根清淨 神通力故 增益[●]壽命 復爲諸人 廣說是經[●]諸著法衆皆蒙菩薩 教化成就 令住佛道[●]不輕命終 值無數佛 說是經故

得無量福 ^④漸具功德 疾成佛道 彼時不輕 則我身是 ^④時四部衆
 著法之者 聞不輕言 汝當作佛 以是因緣 值無數佛 此會菩薩
 五百之衆 并及四部 清^④信士女 今於我前 聽法者是 我於前世
 勸是諸人 聽受斯經 第一之法 開示教人 令住涅槃 世世受持
 如是經典 ^{(c)(3)(1)}億億萬劫 至不可議 時乃得聞 是法華經 ^②億億萬
 劫 至不可議 諸佛世尊 時說是經 ^{⑤①}是故行者 於佛滅後 聞
 如是經 勿生疑惑 ^②應當一心 廣說此經 世世值佛 疾成佛道」

【T.9 p.51 脚註③】「壽=受^④」【T.9 p.51 脚註④】「信=淨^④」（T.9 no.262 p.51b, l.9 - p.51c, l.7）とある。

- (106) 【法輪不絕】参考までに、宗炳（CE.375-443）・劉虬などと親好があり、かつ法華を講じたことが知られている僧慧（CE.408-486）の伝には、宗炳が彼を歎じて「西夏の法輪絶えざる者、其れ慧公に在るか。」（『高僧傳』卷第八・T.50 no.2059 p.378b, ll.23-24）という一文があり、ここに同文例が見られる。

- (107) (a) 「如來神力品」第二十一に「^(c)爾時千世界微塵等菩薩摩訶薩。從地^④踊出者。皆於佛前一心合掌瞻仰尊顏而白佛言。世尊。我等於佛滅後。世尊分身所在國土滅度之處。當廣說此經。所以者何。我等亦自欲得是真淨大法。受持讀誦解說書寫而供養之。」【T.9 p.51 脚註⑥】「踊=涌^④」（T.9 no.262 p.51c, ll.9-14）とある。

- (108) (b) 「如來神力品」第二十一に「^(c)爾時世尊於文殊師利等無量百千萬億舊住娑婆世界菩薩摩訶薩。及諸比丘比丘尼優婆塞優婆夷。天龍夜叉乾闥婆阿修羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽人非人等一切衆前。現大神力^④出廣長舌上至梵世。^⑤一切毛孔放於無量無數色光。皆悉遍照十方世界。衆寶樹下師子座上諸佛亦復如是。出廣長舌放無量光。釋迦牟尼佛及寶樹下諸佛。現神力時滿百千歲。^⑥然後還攝舌相。一時警歎俱共彈指。是二音聲。遍至十方諸佛世界。^⑦地皆六種震動。^⑧其中衆生。天龍夜叉乾闥婆阿修羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽人非人等。……所散諸物從十方來。譬如雲集變成寶帳。遍覆此間諸佛之上。于時十方世界通達無礙。如一佛土。」（T.9 no.262 p.51c, l.14 - p.52a, l.13）とある。

- (109) (c) 「如來神力品」第二十一に「^(c)爾時佛告^④上行等菩薩大衆。諸佛神力如是無量無邊不可思議。若我以是神力。於無量無邊百千萬億阿僧祇劫。爲囑累故說此經功德。猶不能盡以要言之。^⑤如來一切所有之法。^⑥如來一切自在神力。^⑦如來一切祕^⑧要之藏。^⑨如來一切甚深之事。皆於此經宣示顯說。」【T.9 p.52 脚註①】「上行 Viṣiṣṭacāritra.」【T.9 p.52 脚註②】「要=密^④」（T.9 no.262 p.52a, ll.13-20）とある。

- (110) (d) 「如來神力品」第二十一に「^(c)是故汝等於如來滅後。應一心受持讀誦解說書寫如說修行。所在國土。若有受持讀誦解說書寫如說修行。若經卷所住之處。若

於園中。若於林中。若於樹下。若於僧坊。若白衣舍。若在殿堂。若山谷曠野。是中都應起塔供養。所以者何。當知是處即是道場。諸佛於此得阿耨多羅三藐三菩提。諸佛於此轉于法輪。諸佛於此而般涅槃。」(T.9 no.262 p.52a, ll.20-27) とある。

(111) 74行と75行の間に継ぎ目がある。

(112) 『法華經疏』(=[S.2439]・本疏の)「觀世音品」に「二佛者欲明佛至極之果。正明萬善同歸妙果理無異趣。此表一乘義。」(T.85 no.2751 p.197a, ll.26-27・S.2439 p.7, ll.141-142) と類似する文例が見られる。

※参考までに『法華義疏』卷第二には「印法師云。此經辨無量萬善也。以現在行無量萬善故來世成佛。問若說萬善成佛與法華何異。彼答云此中但覆相明萬善成佛。不言萬善之外無別三乘義。此但是顯實未開權也。故與法華爲異。稱之爲序也。」(T.34 no.1721 p.467b, ll.10-15) とある。

(113) 【万善同歸】「万善（三乗）が等しく同一（一仏乗）に帰着することをいう。南地の五時教判においては法華經を第四時万善同歸教といい、三を会して一に歸し万善にことごとく菩提に向かうを指し、智顗以前に南地の教判に法華經を万善同歸の教としていたことが知れる。」詳しくは（多田孝正 [1985] pp.165-166）参照。

(114) 【三乗丈六】同文例は、恵襲写（CE.545）『法華經文外義』に四例（ZW.2 no.20 p.336a）、吉藏撰『法華統略』卷上本に「其既不定。三乗丈六。豈是實哉。」(SZ.27 no.582 p.455a, l.18) と一例見られる。

(115) 以下欠。写本の写真で見える限り、切断部分は [S.2439] とは重ならない。

(116) 【T.85 p.194 脚註④】「首闕」、[暑70] に見られる現行本『妙法蓮華經』「如來神力品」第二十一の最後の經文は「說此經功德猶不[能]盡」(T.9 no.262 p.52a, ll.16-17・BD06196 p.4, l.98) であり、[S.2439] に見られる「如來神力品」第二十一の最初の經文は、「以要言[之]」(T.9 no.262 p.52a, l.17・S.2439 p.1, l.4) であつて、釈されるべき經文からみれば、両者の釈文は過不足なくつながっている。

(117) 『大正藏』には「爾」とあるが、写本に「示」とあるため、「示」に訂正した。

(118) （平井有慶 [1993] p.656）に「この用法は、吉藏の『義疏』に言う「初分の經の乗權乘実の法。（大正三四・六一八c）のそれに通ずるといえようか。」とある。

(119) 『大正藏』には「深」とあるが、写本に「然」とあるため、「然」に訂正した。

(120) 『大正藏』には「寶」とあるが、写本に「實」とあるため、「實」に訂正した。

(121) 『大正藏』には「一切」とあるが、写本には「切」とある。

(122) (P.4567 l.18) 参照。

(123) 『大正藏』には「之」とあるが、写本に「二」とあるため、「二」に訂正した。

- (124) 『大正藏』には「關」とあるが、写本に「開」とあるため、「開」に訂正した。
- (125) 『大正藏』には「物」とあるが、写本に「初」とあるため、「初」に訂正した。
- (126) 「如來神力品」第二十一に「爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言」^①諸佛救世者 住於大神通 爲悅衆生故 現無量神力 ^②舌相至梵天 身^③放無數光 爲求佛道者 現此希有事 諸佛^④警歎聲 及彈指之聲 周聞十方國 ^⑤地皆六種動 ^⑥以佛滅度後 能持是經故 諸佛皆歡喜 現無量神力 囑累是經故 讚美受持者 於無量劫中 猶故不能盡 是人之功德 無邊無有窮 如十方虛空 不可得邊際 ^⑦能持是經者 則爲已見我 亦見多寶佛 及諸分身者 又見我今日 教化諸菩薩 能持是經者 令我及分身 滅度多寶佛 一切皆歡喜 十方現在佛 并過去未來 亦見亦供養 亦令得歡喜 諸佛坐道場 所得祕要法 能持是經者 不久亦當得 能^⑧持是經者 ^⑨於諸法之義 名字及^⑩言辭 樂說無窮盡 如風於空中 一切無障^⑪礙 於如來滅後 知佛所說經 因緣及次第 隨義如實說 如日月光明 能除諸幽^⑫冥 斯人行世間 能滅衆生闇 教無量菩薩 畢竟住一乘 ^⑬是故有智者 聞此功德利 於我滅度後 應受持斯經 是人於佛道 決定無有疑」【T.9 p.52 脚註③】「持=於^⑭」【T.9 p.52 脚註④】「言辭=言詞^⑮」【T.9 p.52 脚註⑤】「礙=闕^⑯」【T.9 p.52 脚註⑥】「冥=瞋^⑰」(T.9 no.262 p.52a, l.27 - p.52c, l.2) とある。
- (127) 『大正藏』には「度緣」とあるが、写本・『妙法蓮華經』「如來神力品」の該當箇所に「度後」とあるため、「度後」に訂正した。
- (128) 『大正藏』には「佛」とあるが、写本に「口」とあるため、「口」に訂正した。
- (129) (P.4567 l.81) 参照。
- (130) (P.4567 l.25) 参照。
- (131) 『大正藏』には「無」とあるが、写本に「冥」とあるため、「冥」に訂正した。
- (132) 『大正藏』には「人」とあるが、写本に「大」とあるため、「大」に訂正した。
- (133) (a) 「囑累品」第二十二に「^①爾時釋迦牟尼佛。從法座起現大神力。以右手摩無量菩薩摩訶薩頂。而作是言。我於無量百千萬億阿僧祇劫。修習是難得阿耨多羅三藐三菩提法。今以付囑汝等。汝等應當一心流布此法廣令增益。如是三摩諸菩薩摩訶薩頂。而作是言。我於無量百千萬億阿僧祇劫。修習是難得阿耨多羅三藐三菩提法。今以付囑汝等。汝等當受持讀誦廣宣此法。令一切衆生普得聞知。」(T.9 no.262 p.52c, ll.4-12) とある。
- (134) (b) 「囑累品」第二十二に「^②所以者何。^③如來有大慈悲。^④無諸慳吝亦^⑤無所畏。能與衆生佛之智慧如來智慧^⑥自然智慧。^⑦如來是一切衆生之大施主。汝等亦應隨學如來之法。勿生慳吝。^⑧於未來^⑨世。若有善男子善女人。信如來智慧者。當爲演說此法華經使得聞知。爲令其人得佛慧故。^⑩若有衆生不信受者。當於如來餘

深法中示教利喜。汝等若能如是。則爲已報諸佛之恩。」【T.9 p.52 脚註⑧】「自然智 Svayambhūjñāna。」【T.9 p.52 脚註⑨】「[世]－㊦」(T.9 no.262 p.52c, 11.12-21) とある。

- (135) (c)「囑累品」第二十二に「[㊦]時諸菩薩摩訶薩。聞佛作是說已。皆大歡喜遍滿其身。益加恭敬曲躬低頭。合掌向佛俱發聲言。如世尊勅當具奉行。唯然世尊。願不有慮。諸菩薩摩訶薩衆。如是三反俱發聲言。如世尊勅當具奉行。唯然世尊。願不有慮。」(T.9 no.262 p.52c, 11.21-26) とある。
- (136) (d)「囑累品」第二十二に「[㊦]爾時釋迦牟尼佛。令十方[㊦]來諸分身佛各還本土。而作是言。諸佛各隨所安。多寶佛塔還可如故。說是語時。十方無量分身諸佛坐寶樹下師子座上者。及多寶佛。并上行等無邊阿僧祇菩薩大衆。舍利弗等聲聞四衆。及一切世間天人阿修羅等。聞佛所說。皆大歡喜。」【T.9 p.52 脚註⑩】「來諸＝諸來㊦」(T.9 no.262 p.52c, 1.26 - p.53a, 1.3) とある。
- (137) 【T.85 p.195 脚註⑪】「命＝爾？」
- (138) 不明。参考までに『法華玄論』卷第二には「印法師云終歸常住第一義空。」(T.34 no.1720 p.377b, 11.10-11) とある。
- (139) 【襲】詳細不明。以下に二つの私案を提示しておく。(1)「襲」には「入る」の意味があり従り下は「藥王品」の注釈に入るというほどの意味であろうか。(2) 写記者などを示す識語か。西域出土法華章疏のなかには、西魏大統十一(CE.545)年に、法海寺の比丘惠襲によって写記された『法華經文外義』(=[上博15(3317)]・ZW.2 No.20) 一卷が知られている。
- (140) 『大正蔵』には「知」とあるが、写本に「智」とあるため、「智」に訂正した。
- (141) 『大正蔵』にはないが、写本に「○」(判読不可)とあるため、一字を補った。
- (142) 『大正蔵』には「二」とあるが、写本に「七」とあるため、「七」に訂正した。
- (143) (a)「藥王菩薩本事品」第二十三に「[㊦]爾時[㊦]宿王華菩薩白佛言。世尊。藥王菩薩。云何遊[㊦]於娑婆世界。世尊。是藥王菩薩。有若干百千萬億那由他難行苦行。善哉世尊。願少解說。諸天龍神夜叉乾闥婆阿修羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽人非人等。又他國土諸來菩薩。及此聲聞衆。聞皆歡喜。」【T.9 p.53 脚註⑫】「宿王華 Nakṣatrarājasamkusumitabhijña。」【T.9 p.53 脚註⑬】「於＝此㊦」(T.9 no.262 p.53a, 11.5-10) とある。
- (144) (b)「藥王菩薩本事品」第二十三に「爾時[㊦]佛告宿王華菩薩。乃往過去無量恒河沙劫有佛。號[㊦]日月淨明德如來應供正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊。其佛有八十億大菩薩摩訶薩。七十二恒河沙大聲聞衆。佛壽四萬二千劫菩薩壽命亦等。彼國無有女人地獄餓鬼畜生阿修羅等及以諸難。地平如掌琉璃所成。寶樹莊嚴。寶帳覆上。垂寶華幡。寶瓶香[㊦]爐周遍國界。七寶爲臺。一樹一臺。其樹去臺盡一箭道。此諸寶樹。皆有菩薩聲聞而坐其下。諸寶臺上。

各有百億諸天作天伎樂。歌歎於佛以爲供養。」【T.9 p.53 脚註④】「〔佛告〕－佛」【T.9 p.53 脚註⑤】「日月淨明德 Candrasūryavimalaprabhāsaśrī。」【T.9 p.53 脚註⑥】「爐＝鑪(元宮), =鑪(明) (T.9 no.262 p.53a, ll.10-22) とある。

(145) 『大正藏』には「明」とあるが、写本・『妙法蓮華經』「藥王菩薩本事品」の該当箇所には「爲」とあるため、「爲」に訂正した。

(146) (c) 「藥王菩薩本事品」第二十三に「爾時彼佛。爲一切衆生意見菩薩及衆菩薩諸聲聞衆。說法華經。是一切衆生意見菩薩樂習苦行。於日月淨明德佛法中。精進經行一心求佛。滿萬二千歲已。得現一切色身三昧。得此三昧已心大歡喜。卽作念言。我得現一切色身三昧。皆是得聞法華經力。我今當供養日月淨明德佛及法華經。卽時入是三昧。於虛空中雨曼陀羅華摩訶曼陀羅華。細●末堅黑栴檀。滿虛空中如雲而下。又雨海此●岸栴檀之香此香六銖。價直娑婆世界。以供養佛。作是供養已。從三昧起。而自念言。我雖以神力供養於佛。不如以身供養。卽服諸香。栴檀。●薰陸。●兜樓婆。畢力迦。沈水。膠香。又飲●瞻蔔諸華香油。滿千二百歲已。香油塗身。於日月淨明德佛前。以天寶衣而自纏身。灌諸香油。以神通力願。而自然身。光明遍照八十億恒河沙世界。其中諸佛同時讚言。善哉善哉。善男子。是真精進。是真眞法供養如來。若以華香瓔珞燒香●末香塗香天繪幡蓋及海此岸栴檀之香。如是等種種諸物供養。所不能及。假使國城妻子布施亦所不及。善男子。是名第一之施。於諸施中最尊最上。以法供養諸如來故。作是語已而各默然。其身火熱千二百歲。過是已後其身乃盡。……若復有人。以七寶滿三千大千世界。供養於佛及大菩薩辟支佛阿羅漢。是人所得功德。不如受持此法華經。乃至一四句偈其福最多。」【T.9 p.48 脚註⑩】「末＝鉢(宮)*」【T.9 p.53 脚註⑦】「岸＝岸(下同)」【T.9 p.53 脚註⑧】「Kunduruka。」【T.9 p.53 脚註⑨】「Turaṣka。」【T.9 p.53 脚註⑩】「Camyaka., 瞻＝瞻(元明)*」(T.9 no.262 p.53a, l.22 - p.54a, l.19) とある。

(147) 『大正藏』・写本には「辟」とあるが、「譬」の異体字であるため、「譬」に訂正した。

(148) 『大正藏』には「導」とあるが、写本に「導」とあるため、「導」に訂正した。「導」と「道」は「言」の意味で通じて用いられるので、意味に変わりはない」(菅野博史 [2006] p.496) 参照。

(149) 『大正藏』には「有」とあるが、写本に「者」とあるため、「者」に訂正した。

(150) 前掲の註 (147) 参照。

(151) 『大正藏』には「心」とあるが、写本に「正」とあるため、「正」に訂正した。

(152) (d) 「藥王菩薩本事品」第二十三に「^(d)宿王華。譬如一切川流江河諸水之中。海爲第一。此法華經亦復如是。於諸如來所說經中。最爲深大。……於一切諸經法中最爲第一。如佛爲諸法王。此經亦復如是。諸經中王。宿王華。此經能救一切

- 衆生者。」(T.9 no.262 p.54a, l.19 - p.54b, l.12) とある。
- (153) (e)「藥王菩薩本事品」第二十三に「宿王華。⁽⁶⁾此經能救一切衆生者。此經能令一切衆生離諸苦惱。此經能大饒益一切衆生。充滿其願。……若書是經卷。華香瓔珞。燒香[●]末香塗香。幡蓋衣服。種種之燈[●]酥燈油燈諸香油燈。[●]瞻蔔油燈。須曼那油燈。[●]波羅羅油燈。[●]婆利師迦油燈。[●]那婆摩利油燈供養。所得功德亦復無量。」【T.9 p.48 脚註⑬】「末=秣[㊦]」【T.9 p.53 脚註⑩】「Camyaka, 瞻=蒼[㊦]明[㊦]」【T.9 p.54 脚註⑤】「酥=蘇[㊦]明[㊦]宮[㊦]博[㊦]」【T.9 p.54 脚註⑥】「Pāṭala.」【T.9 p.54 脚註⑦】「Vārṣika.」【T.9 p.54 脚註⑧】「Navamālikā.」(T.9 no.262 p.54b, l.11-26) とある。
- (154) (f)「藥王菩薩本事品」第二十三に「宿王華。⁽⁶⁾若有人聞是藥王菩薩本事品者。亦得無量無邊功德。若有女人聞是藥王菩薩本事品。能受持者。盡是女身後不復受。若如來滅後後五百歲中。若有女人。聞是經典如說修行。於此命終。即往[●]安樂世界[●]阿彌陀佛大菩薩衆圍繞住處。生蓮華中寶座之上。不復爲貪欲所惱。亦[●]復不爲[●]瞋恚愚癡所惱。亦[●]復不爲[●]僞慢嫉妬諸垢所惱。得菩薩神通無生法忍。得是忍已。眼根清淨。以是清淨眼根。見七百萬二千億那由他恒河沙等諸佛如來。是時諸佛遙共讚言。善哉善哉。善男子。汝能於釋迦牟尼佛法中。受持讀誦思惟是經爲他人說。所得福德無量無邊。……是故宿王華。以此藥王菩薩本事品。囑累於汝。我滅度後後五百歲中。廣宣流布於閻浮提無令斷絕。惡魔魔民諸天龍夜叉鳩槃[●]荼等得其便也。宿王華。汝當以神通之力守護是經。所以者何。此經則爲閻浮提人病之良藥。若人有病。得聞是經病即消滅。不老不死。宿王華。汝若見有受持是經者。應以青蓮花盛滿[●]末香供[●]散其上。散已作是念言。此人不久。必當取草坐於道場破諸魔軍。當吹法螺擊大法鼓。度脫一切衆生老病死海。是故求佛道者。見有受持是經典人。應當如是生恭敬心。」【T.9 p.48 脚註⑬】「末=秣[㊦]」【T.9 p.50 脚註⑪】「瞋=德[㊦]」【T.9 p.54 脚註⑨】「安樂 Sukhāvati.」【T.9 p.54 脚註⑩】「Amitāyus, Amitābha.」【T.9 p.54 脚註⑪】「[[復]-[㊦]博[㊦]」【T.9 p.54 脚註⑫】「復不=不復[㊦]」【T.9 p.54 脚註⑬】「荼=茶[㊦]元[㊦]宮[㊦]博[㊦]」【T.9 p.54 脚註⑭】「散=養[㊦]」(T.9 no.262 p.54b, l.26 - p.55a, l.3) とある。
- (155) 『大正藏』には【T.85 p.196 脚註①】「□□□=生恭敬？」とあるが、写本・『妙法蓮華經』「藥王菩薩本事品」の該当箇所には「生恭敬」とあるため、「生恭敬」を補った。
- (156) 『大正藏』には「二」とあるが、写本に「々」・『妙法蓮華經』「藥王菩薩本事品」の該当箇所には「後」とあるため、「後」に訂正した。
- (157) (P.4567 l.34) 参照。
- (158) (g)「藥王菩薩本事品」第二十三に「⁽⁶⁾說是藥[●]王菩薩本事品時。八萬四千菩薩得解一切衆生語言陀羅尼。多寶如來於寶塔中。讚宿王華菩薩言。善哉善哉。宿

六朝古逸『法華經疏』の同本離片に関する一考察（金）

王華。汝成就不可思議功德。乃能問釋迦牟尼佛如此之事。利益無量一切衆生」

【T.9 p.55 脚註①】「[王]－㊟」(T.9 no.262 p.55a, ll.3-8) とある。

(159) 以下、(T.85 no.2751 p.196a, ll.16f) 参照。

(160) 三回に及ぶ大谷探検隊の西域探検の結果をまとめ、大正4年に学術的な資料提供を目的として刊行された『西域考古圖譜』の下巻には、尾題に「法華義記第一」と記される庫車出土の断片が収録〔＝(51) 隋唐間寫法華經義記卷一（庫車）〕されている。影印は、香川默識編 [1915]『西域考古圖譜』下巻（國華社、東京、p.51）、旅順博物館・龍谷大学編著 [2006]『旅順博物館蔵トルファン出土漢文仏典断片選影』（法藏館、京都、p.209）参照。

(161) 慧龍、僧印、劉虬それぞれ前掲の註（33）、（41）、（93）参照。

(162) 前掲の註（88）参照。

(163) 前掲の註（139）参照。

〈略語〉

CE. Common era（共通年代）

T. 『大正新脩大藏經』

T.in 『大正新脩大藏經索引』

SZ. 『新纂大日本續藏經』

ZW. 『藏外佛教文獻』

S. 大英図書館所蔵スタインコレクション（Stein No.）

P. フランス国立図書館所蔵ペリオコレクション（Pelliot chinois No.）

BD 北京図書館（現、中国国家図書館）蔵敦煌遺書（マイクロフィルム番号）

BnF 『*フランス国立図書館蔵ペリオ将来敦煌漢文文献目録』

Giles 『*大英博物館所蔵敦煌出土支那写本目録』

解説 『鳴沙餘韻解説 燉煌出土未傳古逸佛典開寶』

宝蔵 『敦煌寶蔵』

〈参考文献〉

上山大峻稿 [1979]「唐代仏典の西域流伝の一面『法華玄賛』の出土写本をめぐる」

『唐代史研究会編 [1979]『隋唐帝国と東アジア世界』（汲古書院、東京、pp.455-467）』

上山大峻著 [1990]『敦煌佛教の研究』（法藏館、京都、pp.366-374）

香川默識編 [1915]『西域考古圖譜』上・下巻（國華社、東京）

兜木正亨編 [1978]『スタイン、ペリオ蒐集敦煌法華經目録』（靈友会、東京）

菅野博史訳注 [1996]『法華義記 法華經注釈書集成2』（大蔵出版、東京）

- 菅野博史稿 [2006] 「『法華經文外義』研究序説」（『印度學佛教學研究』55-1、pp.499-492）；菅野博史著 [2012] 『南北朝・隋代の中国仏教思想研究』（大蔵出版、東京、pp.165-177）
- 金炳坤稿 [2008] 「敦煌漢文文献「法華經疏」に関する一考察（経過報告）」（立正大学仏教学部編 [2008] 『ヨーロッパ仏教学の源流と比較文化研修（平成19年度地域仏教研究（三）B報告書；第6冊）』（立正大学仏教学部、東京、pp.9-13）}
- 黄永武主編 [1981-1986] 『敦煌寶藏』全140冊（新文豐出版、臺北）
- 大藏經學術用語研究會編 [1978] 『大正新脩大藏經索引 古逸部 疑似部』第45卷（大正新脩大藏經刊行會、東京）
- 多田孝正著 [1985] 『《佛典講座26》法華玄義』（大蔵出版、東京）
- 中田篤郎編 [1989] 『北京圖書館藏敦煌遺書総目録』（朋友書店、京都）
- 花山信勝著 [1933] 『法華義疏の研究 聖徳太子御製』（東洋文庫、東京）
- Bibliothèque nationale de France [1995] *Catalogue des Manuscrits chinois de Touen-Houang: Fonds Pelliot chinois de la Bibliothèque nationale*, VOLUME V N° 4001-6040, Avec le concours de la Fondation Singer-Polignac, TOME 1 4001-4734, Bibliothèque nationale, Paris.・(<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k2139007>)
- 平井宥慶稿 [1977a] 「敦煌本法華疏三本と吉蔵撰法華疏」（『豊山学報』22、pp.51-72）
- 平井宥慶稿 [1977b] 「曇曠と法華經疏」（『印度學佛教學研究』25-2、pp.229-233）
- 平井宥慶稿 [1977c] 「敦煌本・法華經疏の諸相」（『豊山教学大会紀要』5、pp.62-75）
- 平井宥慶稿 [1978a] 「敦煌本・初期法華經疏」（『印度學佛教學研究』26-2、pp.800-803）
- 平井宥慶稿 [1978b] 「敦煌本・北朝期法華經疏類系譜」（『豊山学報』23、pp.105-124）
- 平井宥慶稿 [1979] 「敦煌資料より知られる吉蔵の思想」（『印度學佛教學研究』27-2、pp.272-277）
- 平井宥慶稿 [1981a] 「竺道生撰『法華經疏』の古形逸文」（『三康文化研究所年報』13、pp.21-31）
- 平井宥慶稿 [1981b] 「敦煌本・北朝期法華經疏と他經疏」（『印度學佛教學研究』29-2、pp.259-264）
- 平井宥慶稿 [1981c] 「敦煌本『法華經義疏開題并玄義十門』」（勝又俊教博士古稀記念論文集刊行會編 [1981] 『大乘仏教から密教へ 勝又俊教博士古稀記念論集』（春秋社、東京、pp.839-858）}
- 平井宥慶稿 [1985] 「敦煌本『法花經義疏（卷第五）吉蔵法師撰 道義續集』（一）」（『豊山学報』30、pp.85-96）
- 平井宥慶稿 [1986] 「敦煌本『法花經義疏（卷第五）吉蔵法師撰 道義續集』（二）」（『大正大學研究紀要 佛教學部・文學部』72、pp.45-54）
- 平井宥慶稿 [1991] 「無名の『法華經』研究者たち」塩入良道先生追悼論文集刊行會

六朝古逸『法華經疏』の同本離片に関する一考察（金）

- 編集 [1991]『天台思想と東アジア文化の研究 塩入良道先生追悼論文集』（山喜房
仏書林、東京、pp.373-382）
- 平井宥慶訳 [1992a]「法華義記第三（抄）」{長尾雅人、柳田聖山、梶山雄一監修 [1992]
『大乘仏典 中国・日本篇 第10巻 敦煌 I』（中央公論社、東京、pp.319-338）}
- 平井宥慶訳 [1992b]「法華經義記（抄）」{長尾雅人、柳田聖山、梶山雄一監修 [1992]
『大乘仏典 中国・日本篇 第10巻 敦煌 I』（中央公論社、東京、pp.339-346）}
- 平井宥慶稿 [1993]「敦煌文献よりみた『法華經』研究」{田賀龍彦編 [1993]『法華
經の受容と展開 / 法華經研究12』（平楽寺書店、東京、pp.639-678）}
- 平井宥慶稿 [2000]「敦煌本『法花經義疏 吉藏法師撰 道義續集』」{平井俊榮博士古稀
記念論文集刊行会編 [2000]『三論教学と仏教諸思想 平井俊榮博士古稀記念論集』
春秋社、東京、pp.253-263）}
- 藤枝晃ほか [1959-1963]『スタイン収集文献分類目録解題初稿』（京都大學人文科學研
究所）；京大人文科学敦煌研究班編『敦煌文献解題』（筆者未見）
- 方廣鋁稿 [1992]「吐魯番出土汉文佛典述略」（『西域研究』1992-1、pp.115-127）
- 方廣鋁主編 [1996]『藏外佛教文獻』第2輯（宗教文化出版社、北京、pp.293-354）·
（CBETA Chinese Electronic Tripiṭaka Collection Version April 2011、
ZW02n0020）
- 方廣鋁稿 [1997A]「敦煌遺書中の《妙法蓮華經》及有关文獻」（『中華佛學學報』10、
pp.211-232）·http://www.chibs.edu.tw/ch_html/chbj/10/chbj1008.htm；方廣鋁
著 [1998B]「敦煌遺書中の《妙法蓮華經》及有关文獻」{方廣鋁著 [1998B]『敦
煌學佛教學論叢』下（中國佛教文化研究所、香港、pp.65-103）；【修訂稿】方廣鋁
稿 [1998F]「敦煌遺書中の《妙法蓮華經》及有关文獻」（『法源』16）·[http://
www.zgfy.cn/Article/ShowArticle.asp?ArticleID=46](http://www.zgfy.cn/Article/ShowArticle.asp?ArticleID=46)]
- 方廣鋁、徐憶農稿 [1998D]「南京圖書館所藏敦煌遺書目録」（『敦煌研究』1998-4、
pp.134-143）
- 方廣鋁稿、遠藤健訳 [1997C]「敦煌遺書中の『法華經』注疏」（『中外日報』1997-11-
15、p.1、p.7）；方廣鋁稿 [1998E]「敦煌遺書中の《法華經》注疏」（『世界宗教研
究』1998-2、pp.75-79）
- 矢吹慶輝編 [1917]『シュタイン氏蒐集集燉煌地方出古寫佛典ロートグラフ解説目録』
（宗教大学、巣鴨村）；矢吹慶輝稿 [1917a]『シュタイン氏蒐集集燉煌地方出古寫佛
典ロートグラフ解説目録』（『宗教研究』2-5、pp.169-185）·矢吹慶輝稿 [1917b]
『スタイン氏蒐集集燉煌地方出古寫佛典ロートグラフ解説目録（承前）』（『宗教研究』
2-6、pp.185-196 [pp.194-195]）·矢吹慶輝稿 [1918]『スタイン氏蒐集集燉煌地方出古
寫佛典ロートグラフ解説目録（完結）』（『宗教研究』2-8、pp.153-172）
- 矢吹慶輝編 [1924]『英國博物館所藏スタイン寫本寫眞帖』（啓明会事務所、東京）

六朝古逸『法華經疏』の同本離片に関する一考察（金）

- 矢吹慶輝編 [1925] 『英國博物館藏燉煌出土古寫佛典ロートグラフ略目』（啓明会事務所、東京）
- 矢吹慶輝編著 [1930] 『鳴沙餘韻 燉煌出土未傳古逸佛典開寶』（岩波書店、東京）
- 矢吹慶輝選、啓明會補助 [1931] 『大英博物館所藏オーレル・スタイン蒐集燉煌出土未傳古逸稀覯佛典白寫眞目錄』（大正大學、東京）
- 矢吹慶輝著 [1932] 『燉煌出土古寫佛典に就いて』（岩波書店、東京）
- 矢吹慶輝編著 [1933] 『鳴沙餘韻解説 燉煌出土未傳古逸佛典開寶』（岩波書店、東京）
- 矢吹慶輝稿 [1960] 「敦煌文書の意義」（『大正新脩大藏經會員通信』 4、pp.1-2）
- Lionel Giles [1957] *Descriptive catalogue of the Chinese manuscripts from Tunhuang in the British Museum*, Trustees of the British Museum, London.
- 立正大学仏教学会 [1980] 「兜木正亨先生年譜・論文目錄」（『大崎学報』 133、pp.21-30）
- 旅順博物館・龍谷大学編著 [2006] 『旅順博物館藏トルファン出土漢文仏典断片選影』（法藏館、京都）

〈キーワード〉

慧龍、僧印、劉虬、法華章疏、[P.4567]、[暑70]、[S.2439]、一經四段